

発行所 (郵便番号100)

東京都千代田区丸の内2-4-1
丸の内ビルディング781号室
社団法人スウェーデン社会研究所
Tel (212) 4007・1447

編集責任者 高須裕三
印刷所 関東図書株式会社

定価 200円 (年間購読料参千円)
1977年11月25日発行

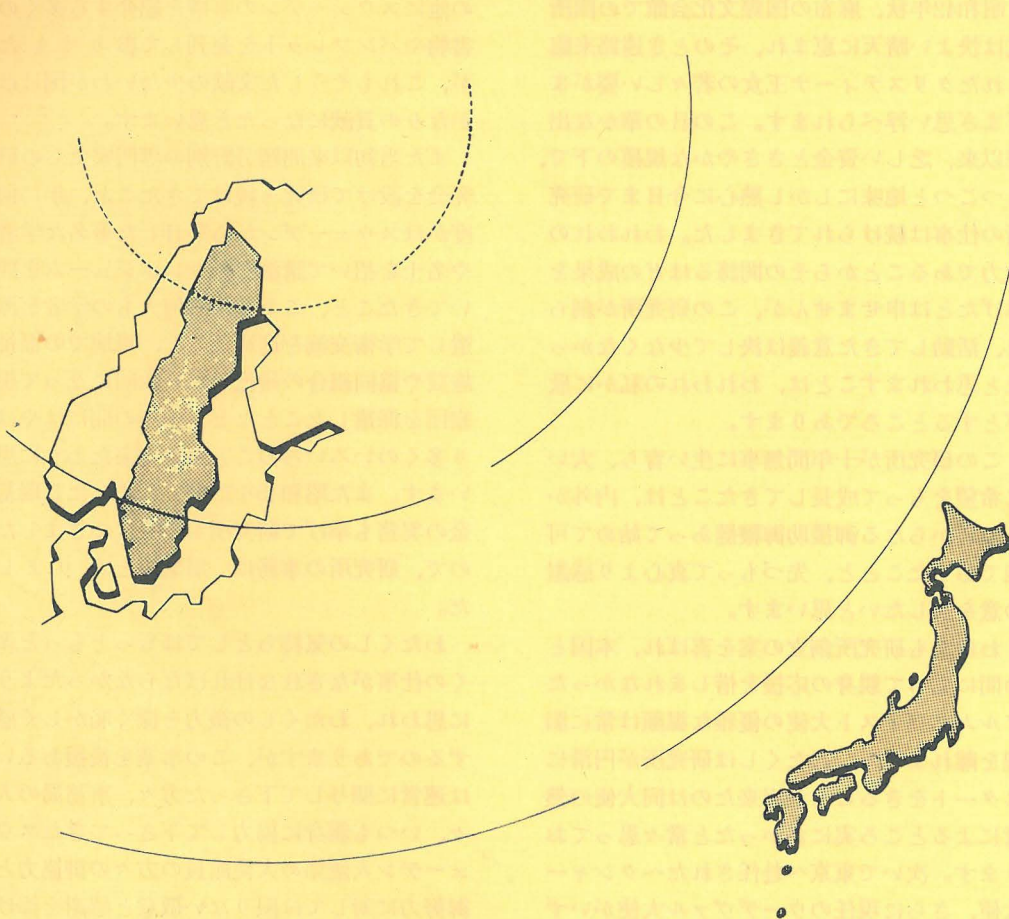
第9巻 第10・11. 合併号
(毎月1回25日発行)

昭和44年12月23日第3種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

Bulletin Vol. 9 No. 10・11 合併号

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning
(The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)
Marunouchi-Bldg., No. 781. Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan



社団法人 スウェーデン社会研究所

創立十周年記念特集号



創立十周年を迎えて

所長 西村 光夫

今年がわがスウェーデン社会研究所の創立十周年に当たります。いまさら歳月の脚の速さに驚かされるのでありますが、顧みるとその間には流石にいろいろのことがあり、感慨浅からざるものがあります。

昭和42年秋、麻布の国際文化会館での開所式は快よい晴天に恵まれ、そのとき遠路来臨されたクリスティーナ王女の若々しい姿がまざまざ思い浮べられます。この日の華かな出発以来、乏しい資金とささやかな規模の下で、こつこつと地味にしかし熱心に今日まで研究所の仕事は続けられてきました。われわれの微力であることからその間誇るほどの成果を挙げたとは申せませんが、この研究所が創られ、活動してきた意義は決して少なくなかったと思われまことは、われわれの私かに欣びとするところであります。

この研究所が十年間無事に生い育ち、大いに希望をもって成長してきたことは、内外からの心からなる御援助御鞭撻あって始めて可能であったことと、先づもって衷心より感謝の意を表したいと思えます。

わけても研究所創立の案を喜ばれ、本国との間に立って親身の応援を惜しまれなかったアルムクヴィスト大使の優雅な温顔は常に脳裡を離れません。わたくしは研究所が円滑にスタートをきる事が出来たのは同大使の熱意によるところ実に多かつたと常々思っております。次いで東京へ赴任されたヘクシャー大使、さらに現任のウーデヴァル大使がいずれも前大使の意図を継がれ、大使館員の人々とともに研究所の活動と発展に尽力を続けて下さってきたことは、われわれの常に感謝措く能わざるところであるとともに、われわれにとって非常に仕合せなことであったと有難く思っています。

研究所が当初からの仕事の一つとしている

スウェーデン語の講習には期待以上の希望者があり、喜しく思うのですが、この講習に多くの日本人が参加することに本国のスウェーデンの人々が強い喜びを示すのはむしろ意外なほどでありました。月々の機関誌(Bulletin)の他にスウェーデンの事情を紹介する多くの書物やパンフレットを発刊して参りましたが、これもそうした文献の少ないわが国にはかなりの貢献になったと思えます。

また当初以来問題分野別の専門家たちの研究会を設けて研究を続けてきたこと、年に何度かはスウェーデンから来日した著名な学者や名士を招いて講演会やシンポジウムを開いてきたこと、こちらから何人もの学者を派遣して学術交流を進めたこと、現地での福祉施設や協同組合の研究のため数回に亘って視察団を派遣したことなど、十年の間にはやはり多くのいろいろのこゝろをして来たように思えます。また昭和45年に創られました日瑞基金の実務も挙げて研究所が引受けてきましたので、研究所の事務は一層繁忙となりました。

わたくしの気持ちとしてはもっともっと多くの仕事になさなければならなかったように思われ、わたくしの微力を深く恥かしく感ずるのでありますが、この事業を後援あるいは運営に関与して下さった方々、事務局の人々、いつも親身に協力して下さってきたスウェーデン大使始め大使館員の方々の御協力と御努力に対しては限りない敬意と感謝を捧げずにはられません。

この十周年を機会に、研究所設立の意義をさらに高めるべく、所員一同とともに次の十年の事業の充実に努力を尽す決意を新たにしております。読者皆様におかれてもさらに一層の御支援御鞭撻を給わりますよう御願ひ申し上げます。

挨拶



わたくしがむかしデンマークを訪問した際、かの国の社会や教育の面に現われた国民精神のありかたに強い印象と刺戟をうけたことは、すでにいろいろの機会に述べてまいったところであります。

デンマークに対する関心は、当然国情の相似たスカンジナビア諸国に拡大いたしました。そしてそれらの国々をしばしば訪問し、その国民たちがよく協力して立派な現代的文化的社会を作り上げてきた状況を見て、日本の将来に向っての国造りの上にも模範として参考となすべき点の多いことを感じたのであります。そこへスカンジナビア諸国特にスウェーデンの社会政策とその成果に興味をもつ学者たちが「スウェーデン社会研究所」というものをつくるについて協力してほしいという話を受けたのであります。わたくしとしても、以上のような気持ちをもっておりましたので、忙しい身ではありますが、少しでもみなさんの勉強のお役に立ち得るなら結構なことと考え、会長就任をお引受けした次第でした。それから早くも10年



10年前、爽やかな秋色深き一日、スウェーデンから遠来の貴賓、クリスティーナ王女を、菊薫る麻布の国際文化会館にお迎えして行なわれた当研究所の開所式の光景は、私のいまだに忘れえぬ思い出の一つとなっております。

以前より私は、北欧の一角に平和と文化を愛好する誇り高き国として、国際社会に不動の地位を確立されたスウェーデンのお国ぶりに多大の敬意と関心とを抱いておりました。先年、外務大臣としてスウェーデンを訪問する機会に恵まれ、その外交・政治・防衛、経済・産業、福祉・教育・文化など種々の面に直接触れることができ、些か見聞を深め、この国には外面的な数量統計では、表現されえない質的にすぐれた何ものかが貫かれて

会長 松前重義

の歳月が経ち、ここに10年祭を祝うことが出来ることになりましたのはわたくしとしてもまことに欣快の至りであります。

この研究所の設立については、スウェーデンの官民も非常な喜びと興味を示され、開所式にはクリスティーナ王女の臨席を得、皇太子（現国王）訪日に際しても、特にわれわれの招きに応ぜられ、会食と共に親しくお話しをする機会を与えられ、われわれとしても非常な光栄としたところであります。

この研究所が出来ましたために多くの出版物を通じてわが国においてまだ比較的知られていないスウェーデンの諸般の事情が広報され、また幾多の人物の交流が実現されつつあることは、両国間の友誼と理解の増進に役立つところ少なくなかったと信じます。わが国の現状及び将来を考えますと、研究所の活動の意義は創立当時より更に一層大きくなっていると考えます。この機会に皆様の一層のご理解とご協力を頂きたく切望する次第であります。

理事長 大平正芳

いることを膚で感じました。

その後、わが国の学者の中にもスウェーデンに対し深い関心と高い評価をもたれる方々があつたと見え、日本に「スウェーデン社会研究所」設立の機運が起り、不肖私は、その理事長就任を要請されたのであります。私はスウェーデンと日本との学芸・情報・文化交流の意義の深さを思つて、その役をお引受けしました。

今日、当研究所10周年の記念の日を迎えるに際し、その間、当研究所の、ないしは当研究所が関係しました行事に親しくご臨席下さいましたクリスティーナ王女や皇太子殿下（現、スウェーデン国王カール十六世）やバーティル殿下などのスウェーデン王室のかたがた、および同国政府、スウェーデン・インスティテュートなどの関係の皆様方の力強いかつお心のこもったご支援は洵に有

難く存じておりました。

また駐日スウェーデン大使は、当研究所発足当時より、アルムクヴィスト閣下、ヘクシャー閣下、そして現在のウーデヴァル閣下と三代にわたりますが、その三方の何れもが当研究所を暖く且つ強力に応援して下さいましたことは、当研究所にとって甚だ心強いことであります。さらにまた日本国内の法人会員や個人会員の方がたの物心両面のご支援があってこそ当研究所が今日まで存続しえたことも改めて申すまでもありません。厚く感謝申し上げます。

また昨年、ツェンペリー来日200年の記念行事

が行なわれ、両国学者諸賢による学術交流がよき成果を結び得ましたことを聞き、200年前の先人の業績を想い、また未来に想いをめぐらして、まことに有意義なことに存じました。

今日、世界的不況に際会し、福祉をはじめ万般の社会・経済的施策に「量から質へ」の旋回のあるべきことが予想されますが、伝統的に質の面に強いスウェーデンとの交流は、とくにわが国にとって有益であろうと思われます。

当研究所10周年に際し、一言御礼とご挨拶とを申し上げ、今後とも相変らずの御好誼・御支援をお願い申し上げます。

スウェーデン社会研究所創立十周年記念パーティー開催

秋深い11月25日東京霞が関の霞が関ビル内東海大学校友会館において、スウェーデン社会研究所創立10周年記念パーティーが開催された。

高須常務理事の司会により、西村所長の開会の辞、松前会長および大平理事長の挨拶、ウーデヴァル スウェーデン大使ならびに高橋通敏元駐瑞大使の来賓挨拶が行われ、引つづいて、10周年記念事業の一つとして行われたスウェーデンに関する高校生小論文募集の入賞者表彰を行い懇親会に入った。

本席には、木内信胤先生、真鍋参議院議員、日向元駐瑞大使ほか、当研究所会員、スウェーデン大使館関係および高校生小論文募集に協力された東京新聞、スカンジナビヤ航空よりのご出席、その他、関係各位約140名のご参加があり盛況をきわめた。



松 前 会 長



大 平 理 事 長



西 村 所 長



ウーデヴァル大使

Congratulatory Statements

H.E. Mr. Bengt Odevall
Ambassador of Sweden

I am most happy to have this opportunity to congratulate the Japanese Institute for Social Studies on Sweden on its tenth anniversary. Geographically speaking, Sweden and Japan are far apart. However, we have a long tradition of scientific and cultural exchange; last year we celebrated the 200th anniversary of C.P. Thunberg's stay in Japan.

In addition to C.P. Thunberg's important botanical discoveries he is said to have planted the ideas of both rationalism and internationalism in Japan, and therefore was probably the inspiration behind the Meiji Restoration ninety years later. He was also the first scholar with an international reputation to introduce the Japanese society to Europe. It is significant that JISSS was a leading co-organiser of the 200th anniversary commemoration last year.

JISSS is thus maintaining a long tradition. Bearing in mind the great importance of international understanding which is based upon a broad knowledge of the world's different societies, JISSS is one of the components of the engine for global development. The activities of the JISSS are very important, and this is manifested by the fact that it is the only institution of this kind in Japan to receive official Swedish financial support.

I wish the Japanese Institute for Social Studies on Sweden a bright and prosperous future.

Mr. Per Fritzon
Press Attaché, Royal Swedish Embassy

I am most happy to have this opportunity to congratulate the Japanese Institute for Social Studies on Sweden on its 10th anniversary. During the past four years that I have been responsible for information on Sweden in Japan I have had an inspiring and fruitful cooperation with the JISSS and I have become more aware of, and have appreciated, the importance of its activities.

International exchange is still dominated by the struggle for material progress. Financial, human and diplomatic resources are today concentrated on efforts to promote trade, technical achievements and the economy. In comparison, the resources available to promote international exchange for human and social progress are relatively poor. The opinion can be heard that the *raison d'être* for such exchanges is in the support of trade. We who are working in the field of information have the inspiring task of promoting the understanding of values other than the material ones. In the international scene we can also remain unhindered by the complexities of competition. This gives us the opportunity to create close personal relationships built on idealism.

For ten years the JISSS has made an important contribution towards the understanding of the Swedish society. I do not hesitate in giving it credit for the increasing interest amongst Japanese scholars in the Swedish model, manifested by the continual rise in requests for information documents from the Press and Information Office of the Royal Swedish Embassy, and by the additional number of study visits to Sweden by individuals and groups interested in social sciences. More evidence of the JISSS' activities is the great number of articles in newspapers and magazines on the Swedish society written by its members. This however is only the tip of

the iceberg. The most important thing, perhaps, is that studies on the Swedish society are made in university seminars headed by eminent scholars.

It is my sincere hope that the JISSS, after its first decade, is so deeply rooted in the Japanese society that it has sufficient strength to grow and to develop further its important role in contributing towards the mutual understanding between Sweden and Japan.

Thus, with great pleasure, I wish the Japanese Institute for Social Studies on Sweden a successful and prosperous development for many years to come.

Mr. Nils-Gustav Hildeman
Program Director of the Swedish Institute,
Council Member of the Sweden-Japan Foundation

The vital need for international exchange in education and research is questioned by nobody. Equally necessary is a constant exchange of experiences and ideas at the international level. Within the total network of such exchanges, a co-operation between Japan and Sweden is an indispensable element.

It is natural that the interchange between two highly developed and highly industrialized countries such as Japan and Sweden is largely taking place within the areas of industry and technology. However, as soon as there is a certain volume of co-operation in these areas a need arises for broader information and knowledge about each country's cultural, social, economic and political conditions. It is within this sphere that the Japanese Institute for Social Studies on Sweden is making a most substantial contribution.

The physical distance between Japan and Sweden is a problem in itself. The "cultural distance" is in many ways a problem of similar magnitude. By making Sweden more easily comprehensible to Japanese people, the JISSS has undoubtedly done a very great deal during its ten years of existence to reduce this gap. There is, in fact, no institute quite like it anywhere in the world, not even among Sweden's closest neighbours. It would also be difficult to point to any non-Swedish institution that has worked more consistently for the purpose of spreading knowledge about Sweden's social and economic structure and systems. Through and along with this work the JISSS has contributed greatly to an improved and expanded interchange of ideas and experiences between our two countries.

The Swedish Institute in Stockholm has had the privilege of co-operating quite closely with the JISSS over the years. It is with great pleasure that we extend our warmest well-wishes to our colleagues in Tokyo on the occasion of their Institute's tenth anniversary.

Prof. Gunnar Hambræus
Chairman of the Sweden-Japan Foundation
Mr. Arne Berglund
President of the Sweden-Japan Foundation

It is our great honour and pleasure to congratulate you warmly on the 10th Anniversary of the Japanese Institute for Social Studies on Sweden.

During the years, your institute has contributed greatly to increase the knowledge of Swedish society in

Japan. A fine example of this work was the arrangement of the C.P. Thunberg symposium last year.

We want to thank you for the good cooperation during the last ten years and to express our hope that your institute will be successful in its work also in the years to come.

Mr. Ralph W. Green

Technical-Scientific Attaché, Royal Swedish Embassy

The Society, and especially the cultural traditions and values fostered by the Society, forms a very important background for policy decisions made about technical and scientific research to be performed. On the other hand the results of such research form the basis for the future society. With this in mind it is very natural for the technical-scientific attaché of the Swedish Embassy to encourage and support the important activities of JISSS.

On the occasion of the 10th anniversary for JISSS we would like, not only to convey our congratulations, but also to express our gratitude for many years of fruitful cooperation and our very best wishes for many more successful years to come.

社団法人 経済団体連合会会長 土 光 敏 夫
社団法人 日 瑞 基 金 会 長

最近、わが国の経済力に対する海外からの評価はきわめて高く、またそれとともにその地位にふさわしい国際的責任を果たすよう厳しく要請されているが、他方、国内を見ると経済界は石油ショック以来の深刻な長期不況に呻吟しており、これから一日も早く脱却することが強く望まれている。

そこで輸送施設等の公共投資による産業基盤の整備と並んで、住宅、医療施設、上下水道などわれわれの生活環境を整備し、健全にして活力ある福祉社会を建設することが喫緊の課題となつている。

北欧の王国スウェーデンは、豊かな福祉社会を世界に先駆けて実現した国として日本でも広く知られているが、経済の現状を見ると多少問題もあ

るように思われる。

また同国は独創性高く、きわめて優れた技術を開拓し、独自の経済体制を構築しており、わが国としても学ぶべき点が多々ある。

同国に対して、わが国としても単なる貿易経済関係にとどまらず、技術、知識、情報あるいは人間の交流など様々な段階における交流を一段と活潑化し、スウェーデンとの関係を密にしていく必要があると思われ、その意味でスウェーデンの経済、社会状況等の基礎的研究を続けているスウェーデン社会研究所の活動に期待するところがきわめて大きい。

この研究所が十周年を契機になお一層発展されることを強く希望する。

当研究所の次の10年のために

常務理事 高 須 裕 三

スウェーデン社会研究所は、創立10周年を迎えて、その「第2段階」に入ることになりましょう。その運営にも研究のあり方にも、新機軸の創出が必要となると思われます。それは会員諸賢の智慧の集成によらねばなりませんので、10周年を機に多くの皆様方の御提議・御高導をお願い申し上げます。

いま限られた紙幅で私見の一端を申述べさせて頂くならば、1967年に発足して10年間の「第1段階」では、スウェーデンからの学術・文化・情報の導入が研究所活動の主流をなしていたことは否めません。もとより日本の優秀な学者でスウェーデンの学界に知的貢献をなされた方も幾人かあり、また同様の文化・情報の輸出も幾件か数えられますし、その媒介としての当研究所の活動をいささか内心喜びを以て回想することはできます。しかしながら傾向としては私どもはスウェーデンからの学術・情報の摂取につとめるといふ姿勢が支配的でした。

第1段階がそういう傾向であったことの根拠としては幾つかの線を挙げましょう。第1に、約100年前、われわれの先祖が日本の「近代化」に踏み切ったとき、その師匠とした国々には、近代化の先進国としてのイギリス、アメリカ、フランス、ドイツ等々でした。それらの師匠国をまねることで、日本は文明開化の線で急速に進歩しましたが、その反面「近代」特有の弊害面にも突き進み、自滅の悲運に遭遇しました。敗戦後のわれわれに真に希望を与えてくれたものは、かつては敗戦国でありながら、今日では福祉国家として近代国家よりも一段と高い（あるいは深い）次元を先駆的に歩みつつある北欧諸国の姿でした。われわれはそういう「現代化」先進国としてのスウェーデンの国の体質から、本質的なものを学び、もって敗戦後の日本の国作りに貢献しようと考えました。したがって、当研究所の第1段階での姿勢

が、スウェーデンからの栄養摂取に傾いたのも当然の成り行きでした。

第2の根拠として考えられることは、少なくとも1973年の石油ショックまでは、世界経済も日本経済も（表面上は）順調を保っており、「経済的繁栄の上に築かれた福祉」という形での福祉国家が一般的に可能でした。経済という次元は、その本質としての「一般性」のゆえに世界の諸福祉国家には共通なまたは共通になしうる面や線が多々ありました。（たとえば年金制度の仕組みの如きです。）それゆえ先進国スウェーデンからの輸入に、われわれの姿勢が傾いたのも、60年代を中心とした第1段階では当然の次第でした。

しかるに今日の情況は、世界経済も日本経済も大きな転換期に入り、不況は慢性化し、ひと昔前の繁栄は二度とかえらないでしょう。もはや「経済的繁栄の上に立った福祉」という捉え方も構想も、それだけでは時代遅れとなってきています。今後重要なのは、むしろ生活の智慧を活かし、芸術に喜びを求めめるような「社会的・文化的背景から産み出される福祉」といった型の創造でしょう。その意味では「スウェーデン社会研究所」の「社会」が生きてくるのはむしろ今後の10年にあるといえるかもしれません。

そのように考える場合、私どもとしては、「スウェーデンからの輸入超過」的な従来の姿勢にとどまっていたはならないでしょう。私どもの今後の10年は、スウェーデンの社会・文化と真の意味で「交流」できる日本文化の輸出態勢の整備にも努めなくてはなりません。本来、日本文化は日本一国に孤立したのではなく、東と西との融和する所にその原点があったのでしょから、その意味でも今後の10年の当研究所の仕事は一層重要なものとなりまよう。皆様方の御協力を切にお願い申し上げます。

思い出の記録



クリスティーナ王女を迎えて開所式（1967）



リンドベック教授を囲むシンポジウム（1975）



スウェーデン語講習会



ツェンペリー来日200年記念事業
植樹、右端は大使（1976）



第4回スウェーデン視察団派遣（1977）

寄稿

わたくしにとつての スウェーデン

理事 慶応義塾大学名誉教授

気賀健三

スウェーデンという国は、日本とまったく対照的な国で、日本のもつ悩みをもっていない国だというのが、わたくしがもっているこの国の映像でした。総人口は東京都の人口にも及ばないが、総面積は日本よりやや大きいし、美しい自然と資源に恵まれた国。十九世紀になってからは、戦争に参加しないで、中立を守りつづけているが、軍備は充実している国、日本は十九世紀の後半に世界の文明に照されて以来、何度か戦争に参加しながら、今は無防備に近い状態でいてしかも中立できない国、スウェーデンは今日世界の覇を争う国々のどれとも直接となりあっていないで、よその国がそのあいだに介在しているのに、日本は島国といつても、海の向うには世界の覇を争う国がひかえているという地政学的な対照。国民の文化・教養・富の程度はどうであろう。一概に断定するのは危険かもしれないが、平均的にいって、近代自由主義の生んだ文化と富とでは、日本はどうみてもスウェーデンに劣るといわざるをえないであろう。

日本には日本の固有の歴史があり、文化があるのであるから、西欧的な基準でその国の文化の優劣をきめるのはナンセンスであるけれども、近代的自由主義の価値を高く評価するものにとっては、スウェーデンは先進的であり、学ぶべき多くのものを日本はスウェーデンに求めることができるであろう。

わたくしは、たまたまこの夏北欧の四ヶ国をめぐりあるく機会があつて、ストックホルムには僅か二晩であるが滞在した。そしてかねての映像をまのあたりにみたのである。

美しい都市づくり、おだやかな市民の挙動、森と水の風景、豊かさを象徴するごとくみえる無数のヨットと行きとどいた社会施設。

しかしこういう国も世界の動きから離れてくらすことはできない。インフレーション、失業、財政の困窮、あるいは赤字のうごめき、人間の悩み

はどこへいつても尽きることはない。近代自由主義の行きつまりの一つの姿をわたくしはイギリスにみつける。これからさきイギリスがどうやって昔日の繁栄と栄光をとりかえすかは一つの歴史のみものであると思っているが、スウェーデンの将来はどうなるであろうか。これもまた一つの歴史的なものである。

他山の石

朝日新聞論説主幹 江幡清

スウェーデンの福祉政策について、わたくしは全くの素人であるが、最近いろいろ乱読して興味をひかれたのは、福祉活動におけるコミュニティ、家族、ボランティアの役割が再評価されつつある、という記事である。かつて、イギリスの福祉政策の話を書いたとき、イギリスではボランティア活動が出発点であり、それを公的な福祉活動に連繫させるのだが、スウェーデンでは公的活動がすべてである—というのは、スウェーデンは雪の多い寒い国でもあり、人びとも独立し他人に干渉したがる性格なので、ボランティア活動よりも公的活動で面倒をみるのだ、という主旨であった。なるほどと思ったことであるが、最近、福祉活動に人間味をもたせるために、また費用の膨張を防ぐために、地域社会やボランティアの役割が重視され、再編成されつつある、というのである。

それに関連して思いだすのは、昨年秋の総選挙で、44年間つづいた社会民主党が敗北した、その基本的な原因は何かについて、スウェーデンの知友からいただいたコメントである。1960年代の自治体改革が大きな要因だということで、たとえば市町村など自治体の数は2,500から277に減り、議員や評議員の数も3分の1になった。家族同士や隣人との付き合いに大事なコミュニティが崩壊し、政治的意見を述べ合う場所が減り、市町村の役場は遠くなり、市町村議員と一般住民との間の巨離やギャップが大きくなった。分権化（デセントラリゼーション）の要求が中央党から出され、中央党は過去12年間に得票率を14%から25%近くまで伸ばした、というのである。

この2点がどう関連しあっているのかはともかく、非常に興味ふかく傾聴させられたことどもであった。

心からお喜びを

評議員 元拓殖大学教授

豎山利忠

創立10周、年研究所が確立されたことを心からお喜び申し上げます。高須先生に御紹介を受け、大変ハリ切って会員にさせていただいたのですが、学生たちの研究に利用させていただく一方で、何のお役にも立たなかったことをすまないと思っています。何と言っても福祉国家のモデルでもあり、問題も先駆的に是非いずれも出て参りますので、しっかり勉強しなくてはという情熱には少しも変わりありません。ミュルダールのアジアのドラマは、もうどこの大学に行っても備えつけられています。そのスウェーデンについて、専門の研究機関があることは、皆様にとっては大変な御努力の結果ですけれど、誇りであり、そこに機縁をもつことの出来た私は、ここで御協力を強め、大いに活用させていただきたいと考えます。よろしくお願いしつつ、心から十周年のお祝いを申しのべることにしました。

スウェーデンの良さ

理事 慶応義塾大学教授

加藤寛

一般的には、自分の専門に研究している国を好きになるものだというが、私の研究対象であるソ連はどうにも好きになれない。ロシア人はとても人なつこいし好きな国民だが、共産主義という体制がたまたま不自由を感じさせるためらしい。つまり個人は怠け者で快樂的であたたかい田園的性格であるのに、共産主義という体制のもとでは、厳しく、さい疑心が強くいつも制限されているという融通の悪さがある。

ところがスウェーデンはそれとは全く違う印象を受け、初めて訪れた時から、私はスウェーデンにあこがれてしまった。スウェーデン人個々の性格はロシア人ほど知らないが、どうも一般的印象からすれば、まじめで、働き者で合理的な冷たさがあるように思えてならない。少なくともロシア人ほど農民的ではない。それでいて、国の自由さはソ連で息がつまりそうなものとは正反対だし、原則は原則として、場合によっては融通してくれるその明るさは何といても有難い。日本は自由だとよくいわれるが、スウェーデンのような、平

等をくずさずに温たかさをもった自由はない。日本の場合、融通さもコネによることが多くて平等ではないし、規則にぶつからない限りに自由であるにすぎない。日本では、自由は一定の枠の中で放任されているだけであり、スウェーデンのように個人の責任において自由と規律を自分で作り出すというものではない。

スウェーデン人の清潔さや素直さは決して自由を強制されたり放任されたりする国では育たないものである。北欧を訪れた人は誰でもその居心地の良さにすっかり満足してしまうにちがいない。私自身、ソ連や東欧、西欧、アメリカと何回か訪れているが、どこの国よりも心のやすらぎを覚えるのが北欧であり、スウェーデンである。良いと思うことは何でも実験していくし、いつも平等な配慮をする心づかいは、世界でも稀な国民であろう。

こんなすばらしい国のイメージを、フリーセックスとしてしか日本に伝えなかった罪をマスコミは反省すべきだし、その一方で、まじめなスウェーデンを伝え続けて10年たったスウェーデン社会研究所の功績はまことに大きい。日本では貿易など利益につながらないとその国を軽視する傾向があるが、スウェーデンの人間生活のための実験は、日本に物量以上の、大きな無形の知恵を授けてくれる。その意味でスウェーデンは日本にとってアメリカに匹敵する大国である。

身近かなスウェーデン

大阪医大教授 吉田壽三郎

スウェーデンは私の老人問題への開眼の師であり北欧の風物は私の絵心をそそって止まない。ヨーロッパへ旅するとどうしても足がむく。日本に次いで心の古里というべきか。

1975年には政策科学研究所の「社会保障を中心とする補助金制度の国際比較」研究を、わけて老人問題を軸に行うことになり、まずスウェーデンを訪ね次いでイギリスに亘った。その後私一人ヨットボりに舞い戻った。友人たちを訪ねてみたかったからであった。

この地はスウェーデンでは一番変化の烈しい商工業都市である。この10数年の間に知人たちはそれぞれに人生行路を歩んでいった。衛生教育のDr. S. Haraldsonはいま、北欧共同立の公害衛生学院の理事をしている。地域公医をしていた彼

とともに1月末ラプランドの辺境をスキーで巡回した思い出は昨日のように浮ぶ。しかしすでに彼はVarberg 近くの海辺のサマー・ハウスに手を加えて老後の巣ごもり準備を整えていた。この館からは荒海の水平線に落ちる夕陽を真面に眺められる。淋しいが荘厳な風景に数羽の白鳥がとびかっていた。

この節ヨッテポリだけでなく、ボロスのような田舎町についても中国料理店をみかける。ここで働く日本女性をみた。'59年私がこの地を訪ねたときは岩井産業の出張員只一人がみかけた日本人であった。中国料理店は一軒もなかった。アジア人は珍しい存在で、クリスマス、正月など季節の折目にはニューズ・マンの訪問をうけたほどであった。

野放図な私はこの土地の誰とでも親しくつきあう習性が身につけてしまっている。'75年この地からアムステルダムへと飛び去ろうとエア・ポートへいくとポリに連行された。飛行機を待たして40分以上の厳しい調べが続いた。なにか赤軍の一味と誤認されたあとではわかった。私の名簿からは右も左もいろいろな人名が出た。挙句ヨッテポリの副知事の Martin Bratt が電話で呼出され、ここでようやく証がたったようであった。

ポリの態度は一変した。後日この2~3日前、ストックホルムで赤軍が建物をスケッチして捕えられたことを知った。どうも私のスケッチぐせも一役かっていた様子であった。

Bratt 氏から後程丁寧な慰問の手紙をいただいて恐縮した次第であったが、よきにつけ悪しきにつけいろいろな意味でスウェーデンは日本にとってまことに近い国になった気がしてならない。そしてスウェーデン社会研究所の存在意義は大きいと感じる。その関係の皆さんに私のスウェーデン滞在が機縁になってできたヨッテポリ日瑞協会というフレンドリーな団体のあることを知って交流を深めていただけたらと願うものである。

ほほえましい北欧人

評議員 玉川大学教授 高 井 泉

イギリスのハリッチからデンマーク、ユトランド半島西岸にあるエスベア港行きの連絡船に乗りこんだのは夕刻6時頃であった。夜が明けて船上に出て見ると春の静かな海原を船は北へ北へとばく進していた。午後はるか右舷のかなたに山らし

いものが見えて来たので、船員にもうデンマークの沖だろうか、と訊いてみたら、否未だ、の返事だった。午後は多くの人々でデッキ上は混雑していたが、空には十数羽のカモメが船を追いつもどりつして飛んでいた。きっと船から捨てる残飯



でもたべに集ったのだろうと別に気にもしなかったが、突然その一羽が船に向かって急降下してきたので、はっとおどろきその向うを見ると半ズボンの一少年が、右手に何か白い物を持ち上げて空の一角をじっと睨みつけているのではないか。一体あの児は何をしているのだろう……するとくだんのカモメが少年の持上げているパンらしいエサをあざやかに啜って空高くとび去って行ってしまった。之を見た他のパッセンジャ達も同様エサを鷗どもに与え始めた。やがて今朝ほど尋ねた船員が近づいて来て、もうデンマークの沖ですよ、と知らせてくれた。船は夕刻近くエスベア港に着き上陸前に形式的な旅券と荷物の検査がすむと、コペンハーゲン行の急行に乗るつもりで駅に急いだ。

出発にはまだ少し時間があつたので荷物を預けて市内見物に出かけ小さな公園にたどりつきベンチで一休みしていた。すると、お婆さんが可愛い坊やの手を引いて公園に入って来た。見るとその児は袋からパン屑らしいエサをとり出して、さあどうぞ、と云いながらバラバラとエサを芝生の上に撒き散らしはじめた。すると木立の間から数羽の小雀が現われてそのエサを食べ始めた。今度はお婆さんが自分の手の平の上にエサを置いて高く持上げていると別の雀がとんで来て食べはじめているのではないか。その珍しい状景を眺めた時は、さきに船上で鷗にエサを与へた時に劣らぬ日本ではどうてい想像出来ぬその美しい光景に見惚れてしまったのであった。

以上は、戦前の体験であったが、現在でも尚この珍しい状景に接することが出来るのである。それはコ市のあるシエーラン島のコセア (Korsör) 港とフユン島のニーボー (Nyborg) 間の連絡船の最上デッキに登るとカモメ共がさかんにエサを貰いに集っているのが見られるのである。又田舎町のレストランで食事していると小雀が足もと

に寄って来てエサをあさっている様子など、とてもわが国では想像も及ばぬほほえましい光景にぶつかるのである。

○ ○ ○

キリスト教でもない日本がこの頃12月になるとXマスプレゼントの交換がさかんに行われ、お歳暮とともに今では年末行事の一つとして定着したようである。が然しわが国ではそれらがすべて人間同志の行為であって、もの云わぬ動物へのプレゼントなど思いもよらぬことではあるまいか。ところが、デンマークでは12月に入ると雀など空の野鳥などへもXマスプレゼントが贈られるのである。それは鳥の大好物であるエン麦か大麦を束にして、公園か住宅の窓外又はビルの入口(写真)に出しておいて鳥が自由に食べられる仕組みになっているのである。

○ ○ ○

先年ある団体の案内でスウェーデンのエーレブロから山越えてカールスタートに行く途中のことであった。バスは山道の美しい松林を縫って快調に進んでいたが突然急停車をした。何か事故でも、と車内は騒然となりかけた。すると運ちゃんは、小声で今前方に十数羽の雁の一群が路上で羽休みをしている。やがて翔び立つまで暫くお静かに……不図、もしこれが日本の国内であったら……感無量なものを感じさせられた。

“児童の世紀”を担った スウェーデン

埼玉県立厚生専門学院 荒井 洸

「人々は、痛ましき記憶に充たされ、或は熱烈なる希望に満たされて、世紀の改転を待ち置けた。そして時計が最後の12時を打つと、無数の取り止めもない行末の不安を感じたのであった。彼等は新らしき二十世紀が、恐らくは、確かに、唯一のもの——即ち平和——をのみ与えてくれるだろうと感じた。彼等は、今日悩み戦へる者どもも世紀の改まるとともに再び悩み戦はないで済むやうになるだろうと感じた。」

これは、今から60年以上前、故原田実先生が、学校を卒業したばかりの頃の若き日に、エレン・ケイの『児童の世紀』を訳出した最初の一節である。エレン・ケイは言うまでもなく、スウェーデンが生んだ偉大な女性の思想家であり、『児童の世紀』は、今世紀を迎えるに際し、彼女が子ども

の幸せを願って世に訴えた著書である。

ところで、公害問題がクローズアップされ始めた頃、日本をカナリヤに見立てた「日本カナリヤ論」と云うものの言い方がなされた。急成長の経済社会のトップをきって、命取りになるかもしれないぬ来るべきオーバーヒートもものかは、がむしゃらに走り続ける日本の本質的弱さを外側から冷やかに眺めての、ものたたとえである。30年先のことなど知ったものか、と言う大人たちの刹那的なセリフには、幼い生命をおもう愛、自分たちの生きがい未来につながるというロマンは見られない。

日本は世界の中のカナリヤらしいことは誰しも認めるところだが、しかし、人間社会のなかでのカナリヤは、自分たちの幼い子どもたちであることを心の底から感じ取っているかどうかはあやしい。母乳汚染は更に進行しているという。せめて赤ちゃんのいのちである母乳のことに對してぐらい、なぜ国を挙げて断乎たる処置が取れないのであるのだろうか。もし、母の乳房に抱かれぬ赤子が一般的となるのだと仮定したら、もう何も言うことはなくなってしまふ。

スウェーデンの児童福祉の歴史には厚みがある。その結果としてのすばらしく行き届いた施策、たとえば保育施設や教育のやり方、そして遊び場作りなどには学ぶべき多くの蓄積がある。明るくアット・ホームな保育園、労作教育をたっぷり取り入れた初等教育のカリキュラム、子どもたちが走り回れる空間を随所にはめ込んだ都市作り、などなどから我々は沢山の心暖まるアイデアを読み取ることができる。

77年前、エレン・ケイは『児童の世紀』のなかで次のように述べたのであった。「全人類が真に目醒めて『生殖の神聖』を自覚した時には、「子孫及びその発生、その処置、その教育に関する事柄が社会の中心事業となり、総ての道德、総ての法律、総ての社会施設がそれ等の事柄の周囲に集り来たるであろう。」

(※文中の引用は、いずれも、原田実訳『児童の世紀』大同館書店、大正5年、による。)

ストックホルムと丸の内

北陸製薬株式会社 高橋 文

ごくありふれた市民が日常生活の中でスウェー

デン社会研究所に接するのは、スウェーデン語講習を案内している朝日新聞の片隅の記事であろう。申し込みおよび問い合わせはスウェーデン社会研究所にという言葉に終わっているこの案内に、多少ともスウェーデン語に興味をもっている者はひかれる。そうして私も御多分にもれずに早速申し込みを試みた。そして定員オーバーと丁重に断わられた。1968年のことであった。

その翌年、梅雨の季節に私は横浜から船に乗って日本を離れた。そしてスウェーデンに定着した。緑と湖にかこまれたストックホルムの街は、絵の中の風景のようにこの上なく美しかった。その美しい街でとある日訪れた Svenska Institutet の図書室に、スウェーデン社会研究月報が置いてあるのを見た。その夜、ストックホルムから日本の丸の内にあてて、私に月報を送って下さいと手紙を書いた。それから月報は正確に丸の内からストックホルムの私の手許に届いた。Dagens Nyheter の記事の一部がおぼろげにわかりかけていた頃、スウェーデンの圧縮した記事を日本語で読めるのは有難かった。私はストックホルム大学の学生であり、せっせと大学に通って言葉を学んでいた。

1970年の夏休み、片言のスウェーデン語が話せるようになって私は新聞広告をたよりに、ストックホルム市内の病院薬局にアルバイトがしたいと申し込んだ。面接をした人事課長も薬局長も女性であり、日本で病院薬局の経験があるという私を同性のよしみであっさり採用してくれた。こうして3ヶ月余、毎日通った薬局では実に多くのことを学んだ。薬剤師、技術員等すべて女性であり、とりわけ彼女等の生き方や仕事に対する意欲には目を見張るものがあった。このような意欲がスウェーデン社会の男女平等化を押し進めているのだろうか、或いは社会制度がこのような女性の生き方をうむのだろうか等と考えた。

9月からまた大学に通った。夏の白夜とひきかえに夜がだんだんと長くなり、明るい時間が極端に短くなった。クリスマスが来て、そうして年が明けた。冬は予想程に寒さは感じなかったが、零下20度を越すと外に出たとたん鼻毛が氷った。森の中に散在する湖に一面に厚い氷が張り、休日にはその上を走りつづけて森をぬけ、別の街並みに出会ったりした。そうして4月、ようやく暖かく日が照って春が来たかと思うと雪が降り、また暖かく日が照って今度こそ春と思うと、翌日は容赦なく雪が降った。がっかりしている私に、この

気候を april väder (April weather) と呼ぶのだと友人が教えてくれた。このような気候に耐え抜いているスウェーデン人の気質を考えてみた。やがてクロカスが芽吹き、そして5月、春が来て一年中で一番美しい季節と人々は言い、花々は属毎に芽吹いていた。リンネはきっと春の季節に植物分類についてのヒントを得たに違いない等と想像した。

その年の夏、日本から来られた高須先生、丸尾先生とストックホルムのレストランではじめてお会いした。私は間もなく帰国を予定しており、スウェーデン社会研究所の先生方に会えたことは嬉しかった。そして1972年の初頭、アーランダ空港を発って日本に帰った。1月というのに羽田にはまぶしい程の太陽があふれており、日本をしみじみと感じた。

スウェーデン社会研究所は丸の内の一隅にあり、語学講習にはもう断られることもなく特別クラスに入れてもらった。Staffan Jansson さんが先生であり、日本語ではじめてスウェーデン語を教わった。日本になじむまでの数ヶ月は、研究所に来てスウェーデン語を聞き、スウェーデンのことを読んでみると心がやすらいだ。それから今日まで、語学をはじめいろいろな研究会や講演会、共同研究等に参加させてもらった。

ストックホルムから東京に帰って来た私は、また東京の丸の内を通してスウェーデンを見つづけ、そして時々、その国へ出掛けて行ったりしている。

スウェーデン社会研究所 創立当時の回想

ヤンソン・スタファン

1965年から68年まで、私は文部省の研究留学生として日本に滞在しました。日本に来る前から国際的な文化交流には関心がありましたが、その関心は来日したことによりなお深められました。高須さんからスウェーデンと日本の間の文化的及び社会的交流を目的とする機関を築きたいという話を伺った時、すぐに積極的に協力したのも、私自身、二国間の交流を何とかすすめたいと考えていたからです。

高須さんとは来日1年目の北欧文化協会主催のロシア祭で初めてお会いして以来、私が教えてい

スウェーデン社会研究所設立 10周年記念に思う

(株)日本都市開発研究所
(株)福祉都市研究会

代表取締役 三宅俊治

たスウェーデン語勉強会に参加された折になど、研究所設立のお話が出される前から、たびたびお会いする機会がありました。66年10月、研究所設立のための最初の話し合いがありました。小野寺御夫妻、石渡さん、高須さん、そして私が出席しました。(のち、クルト・フランソンさんも加わりました。) 研究所の活動内容、研究所設立の方法など、討議の内容は集会ごとに煮つめられ、最後に具体的な項目別の規定ができあがりました。

規定の要点は、いかなる方法で日本とスウェーデン両国間の研究及び文化の交流を進めたらよいかということでした。例えばスウェーデン人や日本人を講師に招き、集会を持つとか、スウェーデン語講習会を開催するとか、スウェーデン社会の研究をする人々を援助するとか、日本の研究者がスウェーデンへ研究しに行くことを奨励し、また、スウェーデンの研究者たちが来日の際にはこれに協力するなどさまざまな方法が検討されました。

初めの段階から当時の駐日大使カール・フレドリック・アルムクヴィスト閣下と二等書記官インゴルフ・キゾーフ氏に連絡をとっておりました。御二人ともこの研究所設立に関し深い理解を示し、おしみにく協力をして下さいました。

翌67年の春、西村さんが研究所設立グループに加わりました。討議もこの頃には一応終り、具体的実行の段階に入りました。両国の心ある方々の援助もあって、いよいよ同年10月「スウェーデン社会研究所」が設立されました。

研究所は最初の活動の一つにスウェーデン語講習会がありました。朝日新聞に広告を出したら80名の申込みがあったことをおぼえています。残念なことに半数しか収容することができなかったので約40名の生徒が第1回のスウェーデン語講習会を受けたこととなります。講師はフランソンさん、石渡さん、それに私でした。語学講習会はその後も現在にいたるまで続けられ、総数1,450名の人々がスウェーデン語をこの研究所で勉強しました。講師のメンバーもこの間スウェーデンからの留学生をはじめ何度も交替がありました。

この10年の間、スウェーデン社会研究所は日瑞両国間の情報と理解を深めるため、さまざまな機会を通して活躍してきました。設立の当時を知る者にとりましては研究所の現在の活躍ぶりを見ることは喜びに耐えません。スウェーデン社会研究所が今後、一層発展することを願います。

近年わが国においては、スウェーデンについての関心が高まってきており、この国についての論評が多い。私たち日本人にとって、スウェーデンはどんなイメージをもたらす国なのか。北欧の一角に位置し、美しい自然に恵まれた森と湖の国、静かな、豊かな社会福祉の国など。それに幻想的な白夜の印象も加わって、遠い彼方の夢のような国だったのかも知れない。

しかし、この国が注目をされてきたのは、わが国が高度な経済成長をした反面、新たに環境問題や社会福祉などに見られる歪が生じてきて、人々の間に人間生活尊重の反省が強く打ち出されてきたごく近年のことである。これらの問題について、スウェーデンは一つの手本とも云える存在としてクローズアップされてきたわけである。

ところがこの手本の国は、いろいろの話題をまいてきた。

例えば、スウェーデンでは老人の自殺率が極めて高い、非行少年が街にあふれている、若者の勤労意欲は非常に低く、社会風紀はみだれている。これらは、行き過ぎた社会福祉の結果である。等々。しかもこれらの話題が、わが国の政治、経済の主要な立場にいる人々の間においてさえ混乱して語られ、又一流雑誌、新聞紙上をも賑わした。

スウェーデンを正しく理解し、判断しようとする人々にとって、スウェーデンに関する情報は、余りにも混乱してきたようである。勿論、いろいろの情報があり話題があってよい。しかし、私たち日本人は、とかく物事を短絡して考えがちであるし、極端な判断に走りがちである。まちがった情報や話題がまかり通って、わが国における福祉の行方を誤らせたり、又福祉アレルギーにおちいらせたりしてはならないと思う。

スウェーデン社会研究所が設立されて10年、その地道は調査研究の成果を高く評価するが、更に、これからは、スウェーデンに関する情報提供の最高最良の窓口としての役割をも期待したいと思う。

Some Notes on the Swedish Language Program

Mrs. Gerd Hijino Larsson

From its inception ten years ago, a very important part of the activities of the institute has centered round the language courses. As I understand, the *raison d'être* of these was a rather mixed bag; not least among the blessings was the ensuing pecuniary rewards which would go to reinforce the sparse scholarship endowments of Swedish research students in Tokyo hired to teach.

Now, the need for instruction in the Swedish language has turned out to be quite insatiable, and the program has grown far beyond the early appraisals of its possibilities. There has been no other teaching body to meet this demand and the language classes at the institute has been the starting point (or sometimes more of a midway milestone, perhaps) for a number of Japanese studying on Sweden. More than 1400 students have enrolled in the program; 180 classes have been conducted in all so far. For the past years there has usually been three annual terms, each running with two weekly meetings with each class for eight weeks, allowing the students to complete the three level basic course within a year of study. Beyond this there has also been offered a number of secondary courses over the years, such as advanced grammar, literature, and translation training classes.

The roster of teachers has had a fair sprinkling of journalists and natural scientists filling out the shortages of pure-bred linguists. This melange has worked remarkably well - perhaps adding to the study of inflections and syntax the special flavour of a teaching staff drawing from a great variety of background knowledge. There certainly has been a number of more or less dogmatic approaches to subject matter and students.

As varied and meritorious as the list of teachers over the years may seem, it is no match for the list of students. I can think of no immediate link between them all looking at the wide differences in ages, vocations, and previous training - except of course an obvious yearning to learn Swedish. And that they usually set out to do with the greatest relish. Over the years I have seen a noticeable increase of portable tape recorders, but that aside, the expectant hush at the beginning of each class, the eager unison canting of glossaries, and the more relaxed question-and-answer exchanges at advanced levels remain the same. I think most teachers will agree with me, saying that a more dedicated and enthusiastic crowd of Swedish-learners would be hard to come by. A number of solid friendships have gotten started here (including at least one successful marriage, I hear); a number of friends have been won for Sweden,

I think it is fair to think of these teaching activities as cultural intermediation in no small way. We should recognize our responsibilities as such. Ever since I first started to teach at the institute some eight years ago there has been loose talk about expanding the program, finding a better equipped and more spacious lecture hall, hiring additional staff, etc.

Let us wish for the decade to come that such hopes can be realized and that the chronicler ten years hence will be able to supply some even grander statistics.

現代史をリードする力に

埼玉県勤労者生活協同組合

八 幡 一 範

スウェーデン社会研究所が創立されたのは、ときあたかも日本が高度成長の道をまっしぐらに走っている最中であった。経済成長は正義であり、福祉国家はダメ人間の愚知のようにとられがちな時代であった。この時代に安定成長、福祉志向のこんちを予見し、スウェーデン社会を研究しようという企ては、北欧に関心を抱く若い世代にとって、幕末の松下村塾を連想させる魅力的な出来事と映った。

かねてお世話になっていた高須先生のお誘いが有難く、研究会に出席させて頂いたり、月報の発刊をお手伝いしたりした。昭和43年社団法人認可となり、以来三年半、初期の事務局に専従させて頂くこととなった。

当時の事務局は、二年前に故人となられた出納功氏のほか、女子職員とアルバイトを含めて、2・3人で運営に当たった。氏の風雪に耐えた人柄と、鎌倉の自宅から持参される草花の姿が印象深く思い起こされる。

この経験を通じて感ずることが二つある。一つはこうした民間の研究機関の場合、財政的基礎がある程度しっかりしていなければよい研究成果は上げにくいという点である。創立当時の研究所は、燃料のないまま出航した船のようなものであった。当時は西村所長がいろいろと心を砕かれ、自らオースチンを駆って、資金集めに奔走された。ときには私もお供をした。しかし成果は思い通りに運ばず、1回きりの寄付であったりつき合いの範囲を出ず、目的を理解した後援は得難かった。福祉国家は企業の関心事の範囲になかったのである。事務局はなるべくつつましく運営し、研究会の先生方にも手弁当で仕事をお願いしなければならなかった。

第二は福祉国家というような幅広い対象の研究を実りあるものにするには、各研究分野の学際的協力が必要だという点である。個々の研究者の学問的立場を尊重しつつ、それぞれの分野と研究を組織的に編み上げ、トータルな成果を上げていくような協力が重要なのである。

近代において、歴史を動かし、リードする原動力は学問にあった。スウェーデン社会研究所は、

現代にあってそうした使命を担うべく誕生したものと考えるのは一方的にすぎるであろうか。いまの時代は、そういう舞台まわりに来ている。そのための会員の資質も十分である。10周年を迎えた研究所の今後の活躍を心から期待したいと思う。

老齡年金の充実と 国際文化賞基金の設立

顧問 小野寺 信

スウェーデンは今、国際収支の赤字に苦しみながら、なおかつ高度社会福祉の維持のために努力している。ところが日本は、累積黒字の始末に戸まどっている。そこで、わたしはこの機会に、二つのアイデアを、敢て提案する次第である。

日本の国民1人あたりのGNPは、1973年すでに3,292ドルに達し、スウェーデンの社会福祉が大きく躍進した1963年の2,108ドルを大きく抜いている。スウェーデンは、この程度の経済力を以て、すでに高福祉社会建設の大事業の完成に邁進したとこそ、われわれは心得ておく必要がある。

老齡年金の充実、日本の急務であり、また現在の経済力を以てすれば一気にスウェーデンのレベルをねらうことには問題があるにしても、フィンランド程度には行ける筈だ。フィンランドのGNPは日本より低い、社会保障にその2%を支出している。最も大切なのは、国民の理解と政府の決断である。

これについて思い出されるのは、1950年代末におけるスウェーデンのATP成立の事情である。賛否相反し最後のどたん場まで紛糾した。だがエーランデル首相の断固たる態度により、また自由主義派の一議員の態度変更が幸いして、結局可決成立された。なお、このATP構想は、LO側のアイデアによるものであったことを付加しておく。

国際文化賞基金の設立は、ノーベル賞基金の日本版である。

このような事業をなしとげることによって、日本はエコノミック・アニマルの悪名を返上し、文化大国として堂々名乗をあげることができであろう。これも、現在の経済力を以てしては不能事ではない。むしろ国際的に見て、これを行う責務があると見るべきである。

スウェーデンでノーベル賞基金の設立されたの

は1901年、スウェーデンの貧乏国時代であった。だが早くからスウェーデンを文化国家として格付けしたのは、このノーベル賞基金の運営である。

日本の今日の経済力を以てすれば、国際協力のもとに国際文化賞基金を、ノーベル賞を遙かに凌駕する有力なものにすることも可能であるはずだ。

国際文化賞資金は一個人の出資によらず、広く民間から募金し、大企業の大口参加はもちろん歓迎するところである。

受賞者の銓衡はこれを学士院に依嘱し、芸術賞を設けるならば、これだけは芸術院に依頼することもできよう。何れにしても、ノーベル賞と競合しないように、むしろ、よく協力して運営をより有効ならしめように、努力することが必要である。

貧乏スウェーデンから 福祉スウェーデンへ

評議員 小野寺 百合子

ルンド社会大学学長オーケ・エルメール氏は「貧乏スウェーデンから福祉スウェーデンへ」という本を書いて、スウェーデンは最近まで如何にヨーロッパの北の端の貧乏国であったか、それがどういう経過をたどって短期間のあいだに世界第1級の福祉国家になったかを述べている。日本ではどうかすると、今日のスウェーデンを見て、われわれの及びもつかない高度のパラダイスと思う一方で、スウェーデンは社会福祉政策のゆき過ぎから破綻に瀕しているため研究価値がないという。この両極端の理論はどちらも皮相なスウェーデン観といわざるを得ない。19世紀の終りから20世紀にかけて、食べられないでアメリカへ移住したスウェーデン人の数は100万にのぼったと歴史は語っている。肥沃でない土地、長くてきびしい冬の農業国がゆたかであったはずがない。それがどうして今日の国民生活水準世界一の仲間にはいることができたのだろうか。人間の社会で、その気になりさえすればそれは出来得ることなのだという見本をスウェーデンは示している。その原因を探り、その経過を追求してゆけば、興味本位だけからいっても限りなく面白い。これから充実していかなければならない日本の社会福祉政策全般にとって、貧乏国から出発して福祉国家へ向う道程には無限の示唆が含まれているのではなからう

か。謙虚にスウェーデン社会の各分野をこつこつ勉強することは、明日の日本のために無駄だとは思えない。

老人問題を一つ取ってみても、今から100年前にはスウェーデンでも日本と同じく、農業社会だったから、老親は家族の中で経験者として尊敬され安らかに扶養されていた。それが今日ではスウェーデンの老人はすべて、年金によって個人として人間らしい基本的な文化生活を保障され、社会の中で独立できている。100年の間にスウェーデンの老人はどんな経過をたどってそこまでいったのだろう。決して一足飛びではなかったはずである。老人が若い世代から全く分離してしまい悲惨きわまる生活をした時代があったことを見逃すわけにはいかない。スウェーデンではそれをどう処理して、今日の有名な老人福祉を築き上げたかをまじめに追求していきたいものである。

スウェーデンの年金制度

理事 千葉商科大学教授 松本 浩太郎

年金制度の機能は2つある。すなわち

- ① 所得保障
- ② 長期資金蓄積のための金融機関

である。

スウェーデンでは、この2つの機能を完全に年金制度が充たしている。

- ① 所得保障の機能

年金制度が所得保障の機能を充たすための条件はつぎの5つである。

1. 終身年金であること。
2. 遺族年金があること。
3. 自動スライド年金であること。
4. 公的年金、私的年金が相互に補完し合っ
つぎの不等式を満足すること。

公的年金+私的年金>標準生計費

5. 年金設計に、初期過去勤務年金を導入すること。

スウェーデンはこれら5条件を完全に整備している理想的な国である。

まづ公的年金には①AP（国民基礎年金）と②ATP（国民付加年金）があり、国民はこの2つの公的年金に同時に加入する権利がある。わが国もこれにならって、国民年金と厚生年金に同時加入が出来る様にする必要がある。そして、初期過

去勤務年金を導入することに依って、年金制度の早期成熟化をはかればよいと思う。

つぎの私的年金には、①ITP（ホワイト・カラーのため）と②STP（ブルー・カラーのため）の二つの協約年金がある。さらに各企業ごとには、企業内年金があるので、合計すれば私的年金は3つある。

従って、65歳に達すれば、高負担をつづけて来た人々は、実に5枚の年金証書を獲得できるのである。まさに年金証書こそは終生の財産であり、生涯資産にはかならず、労働期間の40~50年間にわたり、せっせと高負担に耐えぬき蓄積した輝かしい成果である。

最後に、上述のAPは定額制年金であり、かつ賦課方式であるから積立金は皆無であるが、ITP以下4つの公的・私的年金はすべて報酬比例の年金のため積立方式である。そして、ATPの積立金は実にGNPの3分の1の巨額に達し、国家権力の制約をうけることなく中立の長期金融資本体制を確立し、福祉国家の源動力となっている。

わが国の厚生年金の積立金は僅かに16兆円にすぎず、対GNPの割合は8.33%に止っている。しかも運用権は大蔵省資金部に在る。まことにスウェーデンの年金制度と比較すれば、わが国年金政策の後進性が一入、身に沁みてくる。せめて、公的年金である国民年金と厚生年金には同時強制加入の措置が講じられることが望ましい。のみならず速かに初期過去勤務年金の導入をはかり、公的年金全般の即時成熟化を断行する必要がある。実に実に、スウェーデンの年金制度こそは、以って範としたいものである。

働くスウェーデン人

理事 日本大学教授 内藤英憲

1975年でスウェーデンの1人当たりGNPは8,009ドルであって、日本の4,311ドルに比べると約1.9倍にあたっている。もっとも最近はクロナの相場が大分下がっているから、上記の較差はある程度割引して考えなければならないが、それでもスウェーデンが世界の最高所得水準の国の一つであることには変わりないであろう。スウェーデン人の所得におけるもう一つの特色は、その分配がいたって公平だということである。これは課税以前の段階ですでにその方向にあるばかりでな

く、管理職ともなれば6割、7割という高率を税や年金掛金で徴収されるから、可処分所得の段階では、階級的な上下の所得差はさらに小さなものとなっている。

ここにわれわれの日本人的感覚からすると一つの疑問が生ずる。それはこういう情況のもとでは、労働に対するインセンティブが失われるのではなからうかということである。すなわち、絶対的に豊かな水準にあり、しかも人的分配がこのように極端に平等では、働く気がしなくなるのではあるまいかと推測するわけである。

たしかに、あまりの高負担に不平の声も時折耳にしないではない。知人の大学助手は6割以上の負担は、原稿などの執筆意欲をそぐとっている。しかし、別の大学教授のように、その高負担があるが故に、長期的な生活設計に安心感があり、充分働けるのだという人も少なくない。

私のような外国人滞在者の瞥見からすれば、スウェーデン人の勤労意欲がどうであるかは別として、スウェーデン人が、実際によく働いているとはいえるように思う。たとえば、KFの幹部は、朝8時から忙がしく働きはじめるので、電話連絡をとる場合などは、8時半頃まででないかと彼を捕捉できない。また私はストックホルム都心のマンションを借りていたのであるが、初冬ともなれば四六時中うすぐらくて夜も昼も同じようなものとはいえ、朝4時頃から起きだして働きに出掛ける人もあるようであった。ちょっと油断をすればすぐ風邪をひきそうな冷たい空気と陽の目をみない空、日本人ならば恐らく勤労意欲が減退しそうな11月が、スウェーデン人のもっとも働く季節なのだという。

人間の考え方というものは、自然環境や社会制度あるいは慣習などに大きく影響されざるをえない。われわれからすれば、夏働いて冬それこそバカンスでもとればよいのにと思えるところであるが、スウェーデン人は厳しい自然環境のもとで、かえって働く意欲が湧いてくるのかもしれない。また高所得水準、平準化分配のもとでも、わずかな経済的較差あるいは経済外的事情に意義を見出して精を出すのかもしれない。

われわれの慣習から軽々の憶測をくだし、独断におちいることは、極力避けたいと考えている。

近時スウェーデンの 教育改革に学ぶ

評議員 早稲田大学教授 中嶋 博

スウェーデンはかつて日本を教育改革のモデルとした時期があった。すなわち1961年のテレビ学校放送の開始、62年の総合制基礎学校の設立、64年の後期中等教育法の制定、67年をもつての大学入学資格試験の廃止等、1960年代の改革に大きな影響を与えている。同国の学校改革の父といわれるストックホルム大学のフセーン教授 (Prof. Torsten Husén) や放送教育の父とされているスウェーデン教育放送協会のルンドグレーン博士 (Dr. Rolf Lundgren) の言葉によると、日本はまさに「教育先進国」であった。

ところが1970年代に入ると様相は変わってきた。とくに最近の改革は21世紀に向けての福祉社会の前進をめざすものであり、まことに眼を見張るものがある。かつての北欧、スウェーデンの教育を知るものには想像もつかない変化が起っている。現に高等教育庁 (UHÄ) が外国人留学希望者に向けての小冊子に「スウェーデンに関する今までの知識、またこれまで留学した人たちの話は全く役に立たないものであることを注意しておきたい」としているのである。

領域別にかけてみても、(1)1975年のすべての6歳児のための就学前教育の開始、(2)1977年の地域社会の統合をすすめるオープン・プランによる初等・中等教育の再編成、(3)1977年のすべてのものに高等教育の開放、(4)1975年の教育休暇法と成人教育の改革、などまことに多岐に亘っている。

われわれは、ゆとりのある楽しい学校、助け合いの統合教育、地域社会と結びついた学校、大学入試改善、マス教育に対処するヒューマナイゼーション、学習権の確立と生活権の保障、生涯教育体制の確立等を現下の課題としているが、これらはスウェーデンでは最近の改革によりすべて解決されてきている。

スウェーデンは「資格社会」でこそあれ、わが国のように「学歴社会」でないことは、1966年のエリクソン博士 (Dr. Herman Erickson) の詳細な研究の示す通りである。そして今日「学びたいものにはいつでもどこでも無償で学習の手だてを」ということが高等教育の段階にまで及び、リ

カレント教育体制が確立し、人びとがより高いものを追い求めて生ある限り学び続けている「学習社会」(utbildningssamhälle) になっていることに注目したい。

スウェーデンで生活して

評議員 文教大学教授 菊池 幸子

私がスウェーデンという福祉国家に関心を持ち、それに関係する文献などを読み出したのは、もう10数年以上前のことになるが、実際にこの国へ足を踏み入れ、具体的な研究にとりかかったのは、1969年からであるからちょうど八年間になる。その間、スウェーデンに長期に住みついたのは通算で三年であるが、その他の期間も年間2～3回は日本とスウェーデンの間を往復し、毎年数か月は滞在し、いまでは、スウェーデンは私にとって第二の故国という感覚になってしまった。

そんなわけで、スウェーデン社会研究所創立十周年の記念誌に感想をよせるに当たっても、他の人は書かない内側からのスウェーデン描写になると思うが、その点をお許しいただきたい。

1. 気楽に住める若返りの国・スウェーデン

夏の休暇や正月休みなど、一か月以上スウェーデンに滞在した後に日本に帰国した後で、私は「また一段と若返ったようだ」と決って冷かされる。歴年齢のうえでは年々人並みに老化に向っている私にとって、何とも矛盾した話ではあるが、私はこれを「気持の若返り」として喜びを感じている。

スウェーデンに着いた途端に私は、日本での社会的地位や年齢、その他の束縛を一切忘れて、身につけたスウェーデン語の技術だけをもって、裸で飛び込んでゆく。そしてまたそれも許される社会なのである。日本ではよく「年がいもなく……そんなことをして……」とか「大学の教員という人を指導する身でありながら……」などと行動を批判されがちであるため、「このような社会的圧力がなかったら、人間どんなに気楽に生きられるだろう」とかつて考えがちであったが、社会的圧迫のない、個人が人間らしく生きられるのが、このスウェーデンの第一の特色といえるかも知れない。

夫がスウェーデン人であるわが家では、友人・親戚同志の親交を深めるためのホームパーティーを主催するが、ここに集まる夫婦の職業は、実業

家、銀行家、小学校教員、ジャーナリスト、船乗り、労働者夫婦、年金生活者、外国人などもいる。全く日頃の職業生活とは離れて、政治・経済を論じ、芸術・生活を話し、音楽の鑑賞をし、飲み、食い、踊りして、深夜まで屈託なく過す。「広範に人間交流ができて、生活経験が豊かになる」などと、理屈っぽいことは言わなくとも、何とも楽しいのである。「人間が人間らしく生きること」が福祉の本質であるとすれば、すべての社会的束縛をぬきにして、人間が裸で交流することによって、スウェーデン人たちは、これを実践しているといえるし、そして、「自由時間の真の意味の使い方」を知っていると、私は理解できるのである。

また、スウェーデンに住んでもっとも楽しいのは、無限に自然と親しめることであろう。日本の都会生活者には既に忘れ去られた「散歩の楽しみ」をここでは、無条件で味わわせてくれる。ストックホルム市郊外の住居から、十分と歩かず、しげる白樺の林を通り抜けて、無限に続く森と湖に出て、一人で黙々と歩きながら自然と対話をするとき、孤独のなかで、人間としての喜びを見出すことができるのである。人間誰も自然に憧れを持ちながら、金を払わなければ自然すら喜びを味わせてくれなくなってしまった日本の現状と比べて、物欲も社会欲も一切をなくして、味わえるこの自然との対話は、何と恵まれた一瞬であろうか。

これらの経験を通して、気持の若返りがないとしたら、むしろ人間性の本質すら失っているといえるのではないであろうか。これらは、短期滞在のホテル住居で、外側から制度・政策を研究する人たちにはお気の毒ながら理解できない内側からの観察である。現在のスウェーデンは経済不況下であって、経済の立て直し、国民の高負担の悩み、教育・家族問題の解決など、数多くの社会問題をかかえ、福祉社会建設がある程度停滞を示しているとはいうものの、スウェーデン人の「人間らしく生きる生き方」が失われぬ限り、そしてかれらが「自由」のは握を誤まらない限り、スウェーデンの福祉後退はありえないと、私は感じるのである。

2. 実質的な討論が乏しいスウェーデン人

1975年9月から約一年間、ストックホルム大学の日本学科で教鞭をとった。長い間社会学を専攻してきた私の日本学科での講義は、必然的に「日

本社会の制度の変革と現状」を紹介する点に焦点づけられていった。学部および大学院のゼミでも、日本社会を紹介するスウェーデン語の文献がないため、英語で文献を読み、日本語に翻訳し、そして、スウェーデン語で討論するという複雑な言語の授業になってしまった。「日本の家族制度の変遷」を主テーマにしていたが、英語と日本語の講読の期間は、神妙に黙々と勉学にはげむ学生であったが、スウェーデン語で討論となると、急に活気づいてあぐなく議論をたたかわすのである。たとえば「日本の家族主義に、日本人は満足しているのか？」とか「会社の家族主義的経営の長所、短所」「家族主義のなかで、個性はどのように発揮し得るか？」などについて、いちいちスウェーデン人の生き方、スウェーデンの制度のあり方と比較しながら、具体的な問題の追求を行なうのである。できるだけ静かに、事なかれ主義で通そうとする日本の大学のゼミナール(とくに文教大学)と比較して学習意欲と追求欲の強さに驚きながら、拙ない私のスウェーデン語の語学力で応答しにくいことも幾度があった。ここから学びとったスウェーデン人の性格は、自己主張が非常に強いこと、哲学的抽象論ではなく、具体的事象に対しての問題解決を迫まること、そして、自国の制度・政策(福祉国家としての)に強い自信とプライドをもっていることなどであった。自己実現に向けて自立生活の態度を強く養成するスウェーデンの教育方針から、自己主張が強くなるのは当然の結果といえよう。また、具体的な問題解決意欲の強さは、基礎学校九年間の、集団活動における生活指導の成果ともいえるし、スウェーデン人は本来的にプラクティックな生活態度を身につけていたともいえるかも知れない。何より強い印象をうけたのは感情ぬきにして合理的な討論を冷静に継続するということであった。「合理的な判断力」は、民主主義遂行の不可決の条件でありながら、現在の日本では、とかく冷静な討論が持続しにくく、「まあ主義」で結論を出しがちだからである。たとえば、スウェーデンの学生が自国の福祉制度をほめるにしても、必らず日本ないし他国と比較をし、制度・政策の長短を述べたうえで、スウェーデンの利点を論じるのである。ここでスウェーデンの大学生とは、二十歳代前期の青年ばかりでなく、中年の勤労者・主婦および高年の年金生活者なども合せて半数近くいることをつけ加えておこ

う。なぜならスウェーデンでは、高等教育を、生涯教育の場として、完全に一般国民に解放しているからである。

3. スウェーデン人に足りないところ

スウェーデンのよい点、スウェーデン人から学ぶべき点だけを、これまで述べてきたようであるが、長所があれば短所もあるのが、人間生活の通有性である。自己主張が強まり、合理的な判断能力が高まれば、いっぽう人間のもつ情緒性は後退するものであろうか。私がスウェーデン人とのつき合いのなかで常に不満を感じるのは、「言わず語らず相手の気持を理解する」という、人間関係における言外のニュアンスの理解力のなさである。これを東洋人特有の非合理性とってしまえば、それまでだが、個人的交流のなかでも言語によって表現したことだけしか理解してもらえないのが、スウェーデン人に対する物足りなさとなる。

また日常生活上のさ細な問題でも、よく討論を行なって問題解決に迫るが、そのプロセスにおいて、かれらはよく「mitt fel (私のまちがい)、ditt fel (あなたのまちがい)」を選別し、できるだけ mitt fel でないようにもってゆこうとする。もちろん合理的判断による自己主張ではあるが、mitt fel をできるだけ回避する立場であれば、自己反省はしにくいのではないであろうか。自己反省のないときは、たとえ、冷静な判断をしても同じ失敗を繰返えすことになりはしないであろうか。いいかえれば、内向性が乏しいといたいのであるが、もし内向性が東洋哲学的思考で、外向性がヨーロッパ的合理主義であるとするなら、この点は日本人とスウェーデン人との異和感の根きよになるかも知れない。またスウェーデン人は、他人を批判するときによく envis ということばを用いる。これは善意に解すると、「意志が強い」とか「不屈な」という意味になるが、一般的には「がん固な、強情な」という意味である。この言葉を聞いたたびに私は、「自分を中心にして、自己に適応できない人をがん固者」と批判するスウェーデン人の態度を感じ、自己反省の稀薄さを知るのである。この性格が、スウェーデン人を孤独に追い込み、家族間、交友間でも協調しがたく結果的には、離婚率、未婚者の増加を来し、独居生活者の増大という社会問題を生み出すひとつの要因になっているとっては、行きすぎであろうか。

最後に福祉社会に生育する人の長短にふれてみよう。虫も殺さない程、生命尊重の人道的立場をスウェーデン人はつねにとる、という面では全く頭が下る思いがする。しかし半面変動のはげしい競争社会に弱いといえるのではないであろうか。あるスウェーデンの経営者が「スウェーデンは産業資源が豊かで、経済政策も間違っていない。しかし現在は、世界の経済環境がはげしく、変動するため成果が上っていない。環境が安定すれば、スウェーデン経済はよくなる。」といったのを、日本のある企業家が聞いて、「環境が安定するまで待つなんてバカなことだ。経済変動がはげしければ、自己をその変動に適応できるように、変革させなければ、競争社会にはとても勝てない」といって、笑ったというのを聞いたことがある。

スウェーデン社会研究所の十周年記念誌に、誰も書かない、スウェーデンの裏話を書いてしまった。これからスウェーデンに留学しようとする人や、長期滞在を望む人たちに何らかの参考になれば幸いである。

新しい社会・経済政策への期待

理事 中央大学教授

丸尾直美

スウェーデンの経済社会問題に私が関心を持つようになったのは、1963年に、民主社会主義研究会議の福祉国家調査団(团长武藤光朗氏)のメンバーとしてスウェーデンをはじめ訪問したときからである。この調査旅行は北欧三国および西ドイツの労働者教育協会等の好意によって実現したものであるが、この旅行がスウェーデンと私を結びつける契機となった。

以来、現在までに、スウェーデンを訪問する機会が8~9回あった。1963年にスウェーデンを訪問する以前の私は、外国の中ではイギリスに最も関心を持っていたが、スウェーデンを訪問してみて、社会保障、雇用政策、産業民主主義、ニュータウンづくり等の点で、スウェーデンはイギリス以上だということを知り、それ以後、スウェーデンの経済社会問題を研究するようになった。

「社会・経済政策の実験工場」だと呼ばれるだけあって、スウェーデンが「発明」した、社会・

経済政策は数多い。長い伝統を持つオンブズマン制度、1930年代以降導入された各種の景気変動平衡化のための諸政策、1960年代に発展した積極的労働市場政策、基礎年金プラス報酬比例の二階建年金制度、1970年代に入って導入された各種の経営参加制度と労働環境人間化の実験等はその顕著な例である。

これらの政策をみて気が付くことは、それらがいずれも実際の経済的社会的困難を克服するという要請から生れたものだという点である。現在、スウェーデンは、スタグフレーションと国際収支の赤字に悩まされているが、この困難の中から新しい政策が生れてくることが期待される。

世界各国を、悩ましているこの問題を解決する政策が何であるかを予見することは困難であるが、一つは国際経済レベルでの不均衡調整政策であり、国内では社会的インテグレーションを高める政策ではないかと思われる。各種の参加制度の導入は後者の政策の試みの一つともいえる。労働者の経営参加をはじめとする各種の参加制度が社会的インテグレーションを高めることに成功すれば、一方で生産性が向上し、他方で集団エゴ的所得引き上げが抑制されるのでスタグフレーションの緩和と新たな経済均衡の成立を促すことになる。1976年にLOによって提起された従業員共同基金の構想も、1980年代には何らかの形で具体化され、平等化と社会的インテグレーションを促す新たな「実験」として注目されることになる。LO案自体は未熟であり、むしろ社会的対立を招く要素を持つが経営側からの案をも含む各種の代案が政府の委員会で検討されているし、スカンジナビア・エンシルダ銀行のように、企業レベルで従業員基金制度を導入した会社も出ているので、こうした論議と実験の中から、より現実的で社会的合意を得やすい構想が生れてくるであろう。

人口が日本の12分の1で、経済学者も数えるほどしかいないスウェーデンで、数千人の経済学者を擁する日本よりも数多くの経済・社会政策の独創的な案が生れ、しかもこれが具体化される一つの理由は、実際の要請にこたえて、しかも国民的論議を通じて政策が形成されていくからであろう。

政策形成に際してのスウェーデンのもう一つの特色は「機能的集団主義」(functional collectivism)ともいえるものである。それは、各利益集団の利害を越えて共通の利益をもたらすような集団的政策を集団間の協議によって具体化させる

やり方である。日本人も集団主義の国であり、企業内、家族内の小集団内に関しては極めてインテグレーションが強いが、小集団間の集団エゴのために、小集団の利害を越えて共通の利益をもたらすような政策は、総論としては成立しても、各論として実行されることは稀である。この点ではスウェーデン型の機能的集団政策を見習う必要がある。

日本もスウェーデンも現在、ともに深刻な経済的試練に直面しているが、この試練を克服する新たな経済社会政策が、日瑞両国の比較研究の中から生れてくることを期待したい。

スカンジナビアの風土

東海大学助教授 永山 泰彦

昨日までは雲一つない晴天が続き、アイスクリームが恋しい位の暑さだった。しかし、今日は冷たい雨が降り、真冬の東京のような風が吹き、街路樹の病葉が歩道に散っている。白樺、かし(ek)、栃の木(マロニエ)などは黄色くなり、レン(Rönn: ななかまど的一种)やニュータウンに多い浜茄子(現地ではNyponと呼んでいる)の真赤な実が鮮明になる。呼気も白く見えるようになった。人々は早々オーバーを着込み、「今年も夏が終ってしまった」、「今日はさびしい日ですね」と挨拶をしている。地域暖房から蒸気が送られ、室内はすでに冬のムードである。……これは8月末か9月初めにストックホルムで経験する秋の始まりである、と言うよりは、北緯55°から60°までに横たわるスカンジナビア半島の厳しい冬の始まりの情景である。

北緯30°から45°まで、アジア・モンスーン地帯の最北端から亜寒帯(北海道なみ)に位置し、日本海側を除いて冬でも日照が多く、夏は蒸し暑い秋の長い日本列島。そして、時々地震に襲われる火山の裾野に住んでいるわが日本民族には理解を越える世界かもしれない。

11月末から翌年の2月まで、首都ストックホルムでさえ、太陽は朝10時頃昇り、午後3時頃には沈んでしまう。北極圏のラップランドでは、この期間はまったく暗黒の世界である。

人間の生活環境を支える事物として、宗教、法律、風習などと共に風土という要素を強調したの

が有名なモンテスキュー（法の精神）であるが、スウェーデンの社会や福祉を論じる際にこのスカンジナビアの風土が与えた影響は確かに無視できない要素かもしれない。とくに、社会思想の形成を考える際には重要であろう。

モンテスキューが風土論で主張する結論の一つは、風土が民族の思想を形成するという点であろう。工業化社会の今日、このような自然法的な主張を全面的に受容れるのは問題がある。しかし、

文化とか人間の考え方、価値観などを比較する際には大変参考になる。

過去10年間、福祉を充実する過程で、スウェーデンの制度や方式を無批判に称賛したり、また逆にけなしたりする例もみられた。スウェーデンとの交流の基礎がある程度できた現在、制度や方式が成立した背景をもっと冷静に掘下げて、わが国の背景との差異を明らかにすることが必要なのではなからうか。

ご 紹 介

スウェーデン社会研究所役員

会 長	松 前 重 義	理 事 長	大 平 正 芳	所 長	西 村 光 夫
常務理事	高 須 裕 三	常務理事	堀 内 六 郎		
顧 問	小野寺 信		十 河 信 二		高 橋 通 敏
	福 田 貴		宮 部 一 郎		
理 事	奥 原 潔		加 藤 寛		木 内 信 胤
	気 賀 健 三		内 藤 英 憲		平 田 富 太 郎
	松 本 浩 太 郎		松 本 重 治		安 得 三
	丸 尾 直 美				
評 議 員	足 利 惇 氏		鴉 飼 信 成		岡 野 加 穂 留
	岡 村 誠 三		小野寺 百合子		加 藤 良 雄
	菊 池 幸 子	ジョーナス・ゴロー・ガデリウス			関 嘉 彦
	高 井 泉		堅 山 利 忠		中 嶋 博
	永 田 敬 生		武 藤 光 朗		
監 事	油 谷 精 夫		長 谷 川 周 重		

スウェーデン社会研究所法人会員

ガ デ リ ウ ス 株 式 会 社
日 商 岩 井 株 式 会 社
住 友 信 託 銀 行 株 式 会 社
株 式 会 社 住 友 銀 行
住 友 化 学 工 業 株 式 会 社
三 井 物 産 株 式 会 社
ウ エ ス タ ン ・ ト レ ー デ ィ ン グ 株 式 会 社
社 団 法 人 家 の 光 協 会
全 日 本 労 働 総 同 盟
チ ェ ル ベ ル ジ 株 式 会 社
八 千 代 ビ ル デ ィ ン グ 株 式 会 社
日 立 造 船 株 式 会 社

(順下同、敬称略)

ピ ー エ ス 工 業 株 式 会 社
株 式 会 社 日 本 都 市 開 発 研 究 所
フ ジ オ カ 開 発 株 式 会 社
大 八 興 業 株 式 会 社
松 下 電 器 産 業 株 式 会 社
関 西 電 力 株 式 会 社
株 式 会 社 松 坂 屋
森 永 乳 業 株 式 会 社
山 陽 国 策 パ ル プ 株 式 会 社
株 式 会 社 東 海 銀 行
東 京 瓦 斯 株 式 会 社

個人会員の皆様にも厚く御礼申し上げます。

スウェーデン社会研究所

事業活動実績

昭和42年～52年10月

- (目次) 1. 研究活動
- (1) 研究会、講演会開催
 - (2) 委託研究
2. 出版活動
- (1) 市販出版
 - (2) 資料(研究論文)
 - (3) 月報(スウェーデン社会研究月報)
 - (4) 図書、資料の整備
3. 人事交流
4. 視察団派遣
5. スウェーデン語講習会

研究活動

1. 研究会、講演会開催

昭和43年

- スウェーデン民主主義発達史研究会
スウェーデン労使関係研究会(国際化学労連ブランド氏)
スウェーデンの総選挙を視察してと題する岐阜済美短大講師(当時)須藤真志氏講演会

昭和44年

- | | |
|--|----|
| 福祉国家研究会(主査、高須裕三) | 5回 |
| 民主主義発達史研究会(主査、石渡利康) | 9回 |
| 経済産業研究会(主査、丸尾直美) | 5回 |
| 労使関係研究会(主査、丸尾直美) | 1回 |
| 教育研究会(主査、中嶋博) | 4回 |
| 政治研究会(主査、岡野加穂留) | 3回 |
| 老人問題研究会(主査、松本浩太郎) | 4回 |
| 政策研究懇談会(ストックホルム交通公団幹部) | |
| 「スウェーデンの新しい学校教育制度」について公開講演会(日本スウェーデン学校教諭レナート・エンルンド氏) | |
| 「新しい社会経済の探求」と題して公開講演会(土光敏夫、永田敬生) | |

昭和45年

- 民主主義発達史研究会 5回(鈴木幸子、根本英世、石渡利康、河野道夫)
- 老人問題研究会 7回
- スウェーデンの高令者の就労—国井国長
- スウェーデンの老人のケア—体系—吉田寿三郎
- スウェーデンの老人福祉—菊池幸子
- スウェーデンの経済成長と年金—安藤哲吉

- スウェーデンの老人福祉の方向—久保まち子
- スウェーデンの交通災害と防止対策—内藤多喜雄
- スウェーデンの老人をめぐる人間関係—林宏
- 教育研究会 5回
- スウェーデンの労働者教育(永山泰彦)
- スウェーデン経済の最近の動向(小野寺信)
- スウェーデンの大学卒業生組合(高須裕三)
- スウェーデンの児童福祉(小野寺百合子)
- スウェーデンと日本の教育の比較(ステン・アミノフ)
- 経済産業・福祉国家合同研究会(スウェーデンと日本の経済成長の比較—丸尾直美)
- 「スウェーデンの労働組合」講演会(ベルト・エック、ストレーム—L Oエコノミスト)
- 「スウェーデンの公害対策」講演会(堤佳辰)
- スウェーデンの下院議員の教育使節団と教育問題で討議

昭和46年

- 「経済成長と福祉に関する日本とスウェーデンの国際比較共同研究」の準備研究に研究所メンバー渡瑞老人問題研究会11回
- 老人福祉雑感(佐口卓)
- スウェーデンの老人福祉(小野寺百合子)
- スウェーデンの年金基金(永山泰彦)
- スウェーデンの芸術について(田中香澄)
- 老後の企業保障と社会保障(庭田範秋)
- スウェーデンと日本の老人問題の比較(菊池幸子)
- 老令年金の権利保障(国井国長)
- 同盟の老人問題の考え方(同盟—小寺勇)
- 日本の老人問題(森幹郎)
- 年金のスライド制(青谷和夫)
- 老人問題統一研究(中嶋博)
- 経済産業・福祉国家合同研究会 4回
- スウェーデンの金融政策の評価(川口弘)
- スウェーデン経済の現況(ベングト・デラリード)
- 日瑞共同研究「経済成長と福祉」(レジメ打合)
- スウェーデンの対外貿易政策(ベルンド・アルクヴァイスト)
- 民主主義発達史研究会 3回
- 民主主義の発達史(鈴木幸子)
- A History of Sweden 第20章(石渡利康)
- A History of Sweden 第2章(磯野悦子)
- 政治研究会

総選挙とスウェーデン人の政治意識（岡野加穂留）
教育研究会
わが国の第三の教育改革とスウェーデンの教育改革
との対比（中嶋 博）

昭和47年

老人問題研究会
医療をつつむ世界（大渡順二）
デンマークの老人ホームに生活して（悴田美江子）
統一研究（高須裕三、松本浩太郎、岡野加穂留、小
野寺信、永山泰彦）
経済産業・福祉国家、教育合同研究会
スウェーデンの教育改革について（中嶋 博）
スウェーデンの社会状況およびインフレ動向（高須
裕三）
経済産業・福祉国家合同研究会
スウェーデンの都市・住宅政策（佐藤 竺）
スウェーデンにおける機能社会主義の40年（グンナ
ー・アドラカールソン）
日本とスウェーデンの経済成長と福祉比較（川部重
次郎、ラーソン女史）
経済産業研究会
スウェーデンの金融・労働問題の近状について（川
口 弘）

福祉指標比較研究会（丸尾直美）

教育研究会

エレン・ケイの日本への導入（原田 実）

協同組合研究会

スウェーデンの生活協同組合の組織と事業（吉原外
征彦）

日本文化研究会

日本歌舞伎とスウェーデンのドラマ（河竹登志夫）

昭和48年

老人問題研究会

年金問題（松本浩太郎）

ヨーロッパ老人訪問記（吉田寿三郎）

社会保障の長期計画（丸尾直美）

スウェーデンの老人住宅について（永山泰彦）

老人福祉の日瑞比較について（小野寺百合子）

福祉国家研究会

スウェーデンの福祉（百瀬千又）

スウェーデンの町造り（田中 久）

日瑞公害対策の比較（トード・シエルストレーム）

経済産業研究会

スウェーデン産業の今日の問題点（ヨーダール）

国防と社会福祉の財政的関連（小野寺信）

スウェーデンにおける農業合理化政策と農業開発政
策（石川英夫）

経済産業・政治問題合同研究会

スウェーデンより帰って（高須裕三、丸尾直美、菊
池幸子）

政治問題研究会

スウェーデンの選挙予測（セッターベリー）

日瑞共同研究発表会

日瑞労使関係事情（藤田至孝、永山泰彦）

消費協同組合と小規模企業の日瑞比較（内藤英憲）

日瑞両国福祉の社会経済的背景（高須裕三）

日本文化研究会

印度文化と日本文化（田中於菟弥）

最近の科学技術と近代社会と題する講演会（ベンク
ト・ロンビー）

昭和49年

日瑞共同研究発表会

スウェーデンの経済成長下の福祉のなかにおける軍
事予算の在り方（小野寺信）

経済産業・福祉国家研究会

これからのスウェーデン国社会（スバルケル・ヨン
ソン）

日本文化研究会

日本人の哲学と宗教（峰島旭雄）

民主主義発達史研究会

スウェーデンにおける教育の民主化の歴史について
（中嶋 博）

スウェーデンの20世紀民主主義発達史（小野寺信）

教育研究会

成人教育（セッター・ストレーム）

日本の義務教育の印象（ピア・リードベック女史）

スウェーデンの幼児教育および福祉の現状（尾崎彰
男）

協同組合研究会

協同組合活動の新展開（内藤英憲）

日本・スウェーデン・トルコの経済成長の比較と題す
る講演会（ユスティユネル）

昭和50年

教育研究会

スウェーデンの教育を視察して（山本 清）

放送教育の社会的役割（藤竹 暁）

経済産業研究会

人間性確保のためのマン・マシン・システムの開発
に関する研究

協同組合研究会

スウェーデンの消費協同組合（内藤英憲）

昭和51年

教育研究会

放送教育に関する研究（中嶋 博）

スウェーデンの放送教育の実情（中嶋 博）

政治問題研究会

スウェーデンの選挙の見通し（アンカルクローナ）
スウェーデンの選挙（ダールストレーム）
スウェーデンの新政権の意味するもの（フリッツオン）

経済産業研究会

マスメディア・イン・スウェーデン（フリッツオン）
最近のスウェーデン経済の動行（小野寺信）
スウェーデンにおける経営参加の動行（丸尾直美）
「文化・社会に関する情報交換について」（セーゲル
ステット・ウプサラ大学総長を囲むシンポジウム
スウェーデンの研究政策に関する研究会
カール・ピーター・ツュンベリーの事績の研究

昭和52年

「発展途上国の経済援助」と題する大使館主催の世銀
ウリーン博士講演会に出席
「自動化・省力化と労働市場」と題する大使館主催産
業省ブローデン専門官を囲む討論会に出席
「KFの歴史と現状・問題点」（ルンドベリー国際部
長）

教育研究会

「ストックホルム大学で教えて」（菊池幸子）
「スウェーデンにおける心身障害児とその教育（島
中徳子）
「社会保険政策」と題する大使館主催アスプリング前
厚生大臣を囲むワークショップに参加
省エネルギー問題シンポジウム（ルンド大学スヴェ
ン・ヨハンソン学長、ウプサラ大学オーケ・スンド
ボリー教授、経団連共催

2. 委 託 研 究

(1) 厚生省の厚生科学研究補助

昭和46年度「スウェーデンと日本との福祉政策の比
較研究」
昭和47年度「福祉（厚生）指標によるスウェーデン
と日本の比較」
昭和48年度「余暇の背景とその対策」
昭和49年度「スウェーデンにおける医療供給体制と
保障制度—日本の場合との対比において」
昭和50年度「スウェーデンの消費協同組合に関する
研究」
昭和51年度「スウェーデンに見るインフレと不況下
の福祉政策」

(2) 社団法人全日本能率連盟人間能力開発センター委
託研究「人間性確保のためのマン・マシン・システ
ムの開発」（昭和49年度）

(3) 外務省委託研究「スウェーデンの中立外交政策」
（昭和50年度）

(4) 財団法人放送文化基金助成研究「スウェーデンに

おける放送教育の社会的役割と日本への示唆」（昭
和50年度）

出 版 活 動

1. 市 販 出 版

「スウェーデン—自由と福祉の国」（276頁）株式会社
芸林書房発行、昭和46年7月
「スウェーデンの老人と福祉」（142頁）株式会社成文
堂発行、昭和47年12月
「福祉とは何をする事か」（337頁）株式会社至誠堂
発行、昭和51年7月（第2刷）

2. 資料（研究論文）

- 第1号 スウェーデン工業の発展性（ラグナル・ベン
ツェルウプサラ大学教授、小野寺信顧問）
第2号 スウェーデンの印象（土光敏夫）
スウェーデンに学ぶ（永田敬生）
第3号 スウェーデン造船工業の展望と1968年の業績
（小野寺信顧問）
第4号 福祉国家のスウェーデン型（高須裕三）
第5号 スウェーデンにおける公害問題（高橋通敏顧
問）
第6号 スウェーデンの老人福祉（小野寺百合子評議
員、菊池幸子評議員）
第7号 スウェーデン財政金融の基本事情（小野寺信
顧問）
第8号 スウェーデンの生涯教育（中嶋博評議員）
第9号 スウェーデン経済政策の課題—インフレーションとの戦い—（アサール・リンドベックス
トックホルム大学教授—小野寺信顧問）
第10~11合併号 福祉指標によるスウェーデンと日本
の比較（丸尾直美理事）
第12号 スウェーデンの国防政策と国家安全保障の諸
問題（グンナー・ヘクシヤー前駐日大使—小
野寺信顧問）
第13号 スウェーデンの歴史（イングヴァール・アン
ダーソン—鈴木幸子訳）
第14号 スウェーデンにおける社会研究の20年—教育
学の場合—（トールステンストックホルム大
学教授—中嶋博評議員）
第15号 福祉を中心とするスウェーデン経済20年
（1970~90）の見通し（小野寺信顧問）
第16号 スウェーデンの消費協同組合（内藤英憲理事）
第17号 スウェーデンの研究開発政策の歩み（上巻）
（小野寺信顧問）
第18号 スウェーデンの研究開発政策の歩み（下巻）
（小野寺信顧問）

3. 月報発行

(スウェーデン社会研究月報) 会員配布用

昭和43年1月 創刊

体裁 B5版 12~16ページ

内容 スウェーデンに関する研究論文

〃 時事解説

〃 資料紹介

研究所活動状況報告

現在 第9巻 第11号

4. 図書資料の整備

昭和43年末までに開所式でクリスティーナ王女より手渡されたものを含め、スウェーデン国よりの寄贈、その他で約500冊を整備

昭和44年、スウェーデン政府より20冊寄贈、会員より各種パンフレット、スカンセン博物館等に関するスライドフィルム4巻およびその説明テープ4巻の寄贈、前駐スウェーデン大使高橋通敏氏より書籍130冊およびパンフレット寄贈あり

昭和45年、SAS森本氏の協力ですウェーデンの新聞3紙備付、VECKANS AFFÄRER等雑誌も備付

昭和46年、The Swedish Instituteより経済、社会関係小冊子、スカンジナビア銀行等より刊行物、機関誌の寄贈、海外広報誌Sweden Nowの毎月送付

昭和47年、Profile of Swedenなど数冊の寄贈以後、毎年図書、地図、パンフレットの寄贈あり

人事交流

昭和42年

クリスティーナ王女研究所開所式に出席

外務省海外情報局次長 Per A. Sjögren 氏来日

昭和43年

経済使節団団長としてベルティル殿下来日

国際商業事務技術労連執行委員 Erik Magnusson 氏来日

アルネ・ベリルンド氏来日

ウプサラ大学 Hägg 教授、ルンド大学 Holm 助教授等来日

ICF 地域代表 W・ブランド氏来日

前ヨッテボリー大学教授 J・Peterson 氏来日

西村光夫当研究所所長渡瑞

内藤英憲当研究所理事(日本大学教授)渡瑞

昭和44年

産業連盟経済研究所長 Nabseth 博士来日

ウプサラ大学教授 Bentzel 博士来日

スカンジナビア銀行副頭取 Senneby 氏来日

スウェーデン LO 国際局長 Nilsson 氏来日

石渡利康(当時)理事はじめ理事3名渡瑞

昭和45年

スウェーデン技術者による交通視察団来日

ストックホルム経済大学ダーメン教授来日

スウェーデン他北欧4カ国のコンピューター技術調査団来日

日瑞基金創設のためベリルンド氏来日

カール・G・ミュルダール博士来日

カール・グスタフ皇太子殿下来日

国際金属労連(IMF・JC)スウェーデン代表団来日

OECDの日本経済調査団で、フォン・ブラーテン氏、Ekström 氏等来日

Stig Alemyr 氏を団長とする教育使節団来日

シャルマース工科大学学生125名来日

アサール・リンドベックストックホルム大学教授来日

Swedish Institute 副所長ラーシユ・ビオルクボム氏来日

スベルケル・ヨンソン氏等16名産業界の教育事情視察に来日

駐日スウェーデン新大使ヘックシャー博士着任。

スウェーデン経営学修士ら17名経済発展に果した高等教育の役割研究のため来日

当所理事丸尾直美中央大学教授渡瑞

西村光夫当研究所所長東南アジアおよびスウェーデン等ヨーロッパへ渡航

当所評議員岡野加穂留明治大学教授渡瑞

当所顧問小野寺信夫妻渡瑞

昭和46年

クリスティーナ王女再来日

元保守党議員 Gösta Jacobsson 来日

前駐日大使アルムクヴィスト夫妻来日

KF 会長グンナー・エッツラー氏来日

瑞日基金理事長アルネ・ベリルンド氏来日

当所創立協力者の Stafan・ヤンソン氏来日

当所理事高須裕三日本大学教授、当所理事丸尾直美中央大学教授、当所顧問小野寺信氏、当所会長松前重義東海大学総長、当所評議員中嶋博早稲田大学教授、当所評議員菊池幸子立正女子大学教授等渡瑞

昭和47年

「スウェーデン・テクニカルウィーク」に出席のため科学者、財界人等来日

ムーベリー教育担当大臣、オリング教育庁長官等第3回ユネスコ世界成人教育会議出席等のため来日

スウェーデン王立図書館司書イングリット・ベルゴン・ラーソン女史来日

瑞日基金ベリルンド理事長来日

当所顧問小野寺信氏渡瑞

昭和48年

ヨッテボリー大学グスタフソン氏来日
スカンヂナビスカ・エンシルグ銀行のシエルランダー
証券部長代理来日

世界教育連盟のドクター・ヘルマンソン女史来日
ベルテイル殿下を団長とする産業ミッション一行来
日

当所理事丸尾直美中央大学教授渡瑞

昭和49年

前中央党労働婦人部長レナ・セーゲル夫人来日
ピア・リードベック女史幼児教育視察に来日
外務大臣アンダーソン氏夫妻来日

シエル・リンドベリー夫妻幼児教育視察に来日
ルレオ大学ポー・ルンドクヴィスト教授、同大学ポ
ー・エリクソン教授産学共同研究のため来日

ヨハンソン国会事務総長来日

ストックホルム大学アサール・リンドベック博士来日

未来学研究者オーケー・ポールマン氏来日

瑞日基金会長ブローフルト氏来日

ユステイユネル・アンカラ大学教授来日

西村光夫研究所所長渡欧

永山泰彦東海大学助教授渡瑞

昭和50年

アルムクヴィスト・アンド・ヴィクセル出版会社役員
来日

精神病学者ラーシュ・ホルムストレーム氏来日

ヨッテボリー大学ウルバン・ダーレフ教授教育事情視察
に来日

LO のリンドボルム氏来日

Swedish Institute のヒルデマン理事来日

当所理事高須裕三日本大学教授視察団団長として渡瑞

昭和51年

カロリンスカ病院のソルベイグ・ホルムグレン女史来
日

ハンブレウス瑞日基金会長および同基金のリングスト
レーム氏来日

ストックホルム大学国際教育問題研究所所長トールス
テン・フセーン教授来日

ツェンベリー来日 200年記念事業のため、ウプサラ大
学のヘドベリー博士、ストックホルム国立科学博物
館のノルデンスタム博士、ストックホルム林業大学
のタム博士およびリンデル博士来日

ストックホルム大学のチヨウ教授ならびにヨナス・
エンゲベリー氏来日

スウェーデン国防衛調査研究所国際社会部長ブロッ
ク博士来日

ウプサラ大学トグニー・セーゲルステット学長来日

西村光夫当所所長 Swedish Institute および瑞日基金

幹部と懇談等のため渡欧

当所評議員中嶋博早稲田大学教授が放送教育事情視察
のため渡瑞

当所理事内藤英憲日本大学教授は視察団団長として渡
欧

昭和52年

ハンブレウス瑞日基金会長来日

イベロート産業連盟会長来日

ボルボの総合企画室ピーター・エッケンジャー氏来日

世界銀行のウリーン博士来日

KF 国際部長ヘルゲ・ルンドベリー夫妻が当スウェー
デン社会研究所の招待（当所10周年記念事業）に応
じ来日

産業省ブローデン専門官来日

前厚生大臣アスプリング氏来日

ルンド大学学長スヴェン・ヨハンソン博士ならびにウ
プサラ大学生命・地球科学部長オーケ・スズボリ
ー教授来日、両教授を囲み省エネルギーに関するシ
ンポジウム開催

西村光夫当所所長渡瑞

永山泰彦東海大学助教授視察団団長として渡瑞

当所理事丸尾直美中央大学教授渡瑞

視察団派遣

第1回（昭和47年8月25日～同年9月13日）

「スウェーデン福祉国家調査視察団」

（視察目的） 都市・環境、経済・産業、社会福祉、
教育、消費協同組合、地域社会活動

（視察国） スウェーデンのほか、デンマーク、イ
ギリス、フランス、西独

（団 長） 丸尾直美当研究所理事、中央大学教授

（団 員） 荒井冽、池田功、井堀充士、加藤良雄、
下村義武、鈴木武文、関根正道、内藤
英憲、松本浩太郎、山本英也、吉永清、
藤田正実、八幡一範、藤井敏子、渡辺
秀一、松島正儀、高山好正、小林文子、
河野道夫の各氏

第2回（昭和50年8月15日～同年9月3日）

「福祉社会の流通・生協調査視察団」

（視察目的） 生協型消費者活動、小売業の販売戦
略、経済政策の影響

（視察国） スウェーデンのほか、デンマーク、ノ
ールウェー、イギリス、フィンランド、
フランス

（団 長） 高須裕三当研究所常務理事、日本大学
教授

（団 員） 吉岡紹直、吉岡スミ、宇佐川知忠、熊
谷広男、山田清、森川広幸、島田豊、

小室貢、能沢長蔵、竹内栄次、井堀洋介、井堀倫治、河野道夫

第3回(昭和51年8月15日～8月29日)

「福祉社会の流通・生協視察調査団」

(視察目的) 生協型消費者活動、小売業の販売戦略、経済政策の影響

(視察国) スウェーデンのほか、デンマーク、西独、フランス、イギリス

(団 長) 内藤英憲当研究所理事、日本大学教授

(団 員) 大橋隆憲、大橋満子、大野勝也、高橋正雄、中村婚、山田稲造、樋口久雄、久保和俊、近藤義彦、山田長治、大関博、斎藤仁、佐藤正武、岩切浩、小室静、森正一、福田雅一、内藤英二

第4回(昭和52年8月21日～9月4日)

「福祉社会の流通・生協視察調査団」

(視察目的) 生協型消費者活動、小売業の販売戦略、経済政策の影響

(視察国) スウェーデンのほか、デンマーク、西ドイツ、イギリス、フランス

(コーディネーター) 永山泰彦当研究所研究員、東海大学助教授

(アドバイザー) 佐原洋東海大学教授

(") 堀江昭全国農業協同組合連合会生活部次長、

(団 員) 吉江淳、籾下達雄、上原旭夫、仁井田昇、岡部文雄、佐橋竜男、鏑清市、谷川敷男、田村雅弘、大窪由郎、辺見昇孝

スウェーデン語講習会

設立の翌年の昭和43年1月より開始し、8週間を一学期とし、年に3～4回開講し、現在まで開講回数は36回を数え、受講者の累計は1,470名余に達した。

講習会のテキストには当初より、スウェーデンの Almqvist & Wiksell 社発行の“Learn Swedish”を使用し、クラスを初、中、上級に分け、初級では1～8章、中級では9～16章、上級では17～24章を習い、上級まで受講して基礎知識が大体習得できるようになっている。

また46年度から Learn Swedish を修了した人を対象として、一層の実力を養成するために高等科を併設している。

(開講の実績)

昭和43年より昭和48年までは、毎年4回宛

昭和49年より昭和52年までは、毎年3回宛

(講師)

初級、中級および上級のクラスは、原則として日本人講師とスウェーデン講師の組合せにより、前者は文法と解読を、後者は発音、書取りおよび会話を担当する仕組みで、前述の高等科を含め、講師はいずれも経験者に恵まれた。当初以来の講師のご氏名を列記(順不同)し、謝意を表します。

Mr. Staffan Jansson

Mr. Kurt Fransson

石渡利康氏

Mr. Tom Wallenström

加藤絃子氏

Miss Christina Bratt

岡崎 晋氏

Miss Yeva Bergman

Miss Inger Holumboe

Miss Eva-Lotta Nordensäter

Mrs. Gerd Larsson

Mr. Nils-Owe Pettersson

Miss Cecilia Utterström

Mr. Rolf Johnson

高橋 文氏

佐藤一郎氏

Mr. Lennart Utterström

Mrs. Tamiko Bjerner

Mr. Kaj Reinius

Mrs. Gunilla Magnusson

Mrs. Yumiko Jansson

Mr. Olle Kjellin

Mrs. Pia Rydbeck

Mr. Sven Eriksson

栗原恵子氏

Miss Sigrid Flensburg

Mr. Krister Stehag

松岡幹雄氏

Mr. Boo Berglund

Mrs. Gnilla Lindberg Wada

附記 48年には高等科の受講生を対象として会話テキスト Svensk konversation Grundtexter (Gerd Hijino Larsson) が当研究所より発行された。

特 集 号 目 次

	創立十周年を迎えて	所 長 西 村 光 夫	2
挨拶	会 長 松 前 重 義		3
	理 事 長 大 平 正 芳		3
祝 詞	H. E. Mr. Bengt Odevall, Ambassador of Sweden		5
	Mr. Per Fritzon, Press Attaché, Royal Swedish Embassy		5
	Mr. Nils-Gustav Hildeman, Program Director of the Swedish Institute		6
	Prof. Gunnar Hambraeus, Chairman of the Sweden-Japan Foundation, and		6
	Mr. Arne Berglund, President of the Sweden-Japan Foundation		6
	Mr. Ralph W Green, Technical-Scientific Attaché, Royal Swedish		7
	Embassy		7
	日瑞基金会長 土 光 敏 夫		7
提 言	常 務 理 事 高 須 裕 三		8
想い出の記録			9
寄 稿	わたくしにとってのスウェーデン	気 賀 健 三	10
	他 山 の 石	江 幡 清	10
	心からお喜びを	堅 山 利 忠	11
	スウェーデンの良さ	加 藤 寛	11
	身近かなスウェーデン	吉 田 壽 三 郎	11
	ほほえましい北欧人	高 井 泉	12
	児童の世紀を担ったスウェーデン	荒 井 洌	13
	ストックホルムと丸の内	高 橋 文	13
	研究所創立当時の回想	ヤンソン・スタファン	14
	十周年記念に思う	三 宅 俊 治	15
	Some Notes on the Swedish Language Program	Mrs. Hijino Larsson	16
	現代史をリードする力に	八 幡 一 範	17
	老令年金の充実と国際文化賞基金の設立	小 野 寺 信	17
	貧乏スウェーデンから福祉スウェーデンへ	小 野 寺 百 合 子	18
	スウェーデンの年金制度	松 本 浩 太 郎	18
	働くスウェーデン人	内 藤 英 憲	19
	近時スウェーデンの教育改革に学ぶ	中 嶋 博	20
スウェーデンで生活して	菊 池 幸 子	20	
新しい社会・経済政策への期待	丸 尾 直 美	22	
スカンジナビアの風土	永 山 泰 彦	23	
事業活動実績	研 究 活 動		25
	出 版 活 動		27
	人 事 交 流		28
	視 察 団 派 遣		29
	スウェーデン語講習会		30

第三種郵便物認可
昭和44年12月23日

スウェーデン社会研究月報 昭和25年11月25日発行 第9巻
第10・11合併号 毎月1回25日発行 編集責任者 高須裕三 発行所 社団法人スウェーデン社会研究所 定価二〇〇円

目 次

目次

1. 序言

2. 研究報告

3. 研究報告

4. 研究報告

5. 研究報告

6. 研究報告

7. 研究報告

8. 研究報告

9. 研究報告

10. 研究報告

11. 研究報告

12. 研究報告

13. 研究報告

14. 研究報告

15. 研究報告

16. 研究報告

17. 研究報告

18. 研究報告

19. 研究報告

20. 研究報告

21. 研究報告

22. 研究報告

23. 研究報告

24. 研究報告

25. 研究報告

26. 研究報告

27. 研究報告

28. 研究報告

29. 研究報告

30. 研究報告

31. 研究報告

32. 研究報告

33. 研究報告

34. 研究報告

35. 研究報告

36. 研究報告

37. 研究報告

38. 研究報告

39. 研究報告

40. 研究報告

41. 研究報告

42. 研究報告

43. 研究報告

44. 研究報告

45. 研究報告

46. 研究報告

47. 研究報告

48. 研究報告

49. 研究報告

50. 研究報告

51. 研究報告

52. 研究報告

53. 研究報告

54. 研究報告

55. 研究報告

56. 研究報告

57. 研究報告

58. 研究報告

59. 研究報告

60. 研究報告

61. 研究報告

62. 研究報告

63. 研究報告

64. 研究報告

65. 研究報告

66. 研究報告

67. 研究報告

68. 研究報告

69. 研究報告

70. 研究報告

71. 研究報告

72. 研究報告

73. 研究報告

74. 研究報告

75. 研究報告

76. 研究報告

77. 研究報告

78. 研究報告

79. 研究報告

80. 研究報告

81. 研究報告

82. 研究報告

83. 研究報告

84. 研究報告

85. 研究報告

86. 研究報告

87. 研究報告

88. 研究報告

89. 研究報告

90. 研究報告

91. 研究報告

92. 研究報告

93. 研究報告

94. 研究報告

95. 研究報告

96. 研究報告

97. 研究報告

98. 研究報告

99. 研究報告

100. 研究報告